

1

平成25年度

研究開発実施報告書

～第1年次～

北海道教育大学附属札幌小学校  
外7校

平成25年度

研究開発実施報告書

(要約)

～第1年次～

北海道教育大学附属札幌小学校

外7校

## 平成25年度研究開発学校実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

### 2 研究の概要

小学校第1学年から新教科「小学校英語科」を導入し、国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力と積極的な態度の育成を目指す。具体的には、

- ①「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方
- ②4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方
- ③小中の教師間交流、児童生徒間交流、カリキュラム連携の在り方

を研究する。

中学校では、英語の時間の一部を小学校との継続的な指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。

さらに、英語学習における「学びのイノベーション」を目指し、ICT 機器を利用した個別学習、遠方の仲間や海外の子どもたちとの英語を介した協働学習や交流学习の在り方を研究するとともに、その成果を、いつでもどこからでも誰にでも利用できる蓄積発展型教材としてウェブ上でデータベース化し、その効果的活用を図るための指導方法や評価方法をあわせて開発する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 現状の分析と研究の目的

外国語活動が小学校第5学年から導入されたことによる望ましい変化として、「聞く力」が高まっていることを実感している中学校教師は多い。また、英語の発音がよくなっている、語彙が増えている、授業時におけるアクティビティに積極的であるなど、音声面や意欲面での向上も報告されている。

このように外国語活動の導入により、小学生のコミュニケーション能力の素地の育成がなされているが、小学生でも高学年であれば、音声だけではなく、学んだ表現を文字で書いてみたい、書かれている英文を読んでみたい等の知的好奇心が芽生える児童も出てくる。

英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査(平成22年10月 文部科学省国際教育課外国語教育推進室)によれば、「英語の授業で楽しいと思うこと」という設問に対し、「英語の文字や単語を読むこと」と答えた児童は小学校6年生で55.1%、「英語の文字や単語を書くこと」と答えた児童は53.4%にあがる。学習者の知的欲求が、「読むこと」「書くこと」につながっていると思われる。

国際社会において主体的に活躍するためには外国語を運用する能力が必須であるが、その根幹となるのは、異文化への関心であり、異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において、現状の外国語活動は、コミュニケーション意欲の向上に大きく寄与している。しかし、一方、コミュニケーション能力の育成のためには、言語や非言語のあらゆる手段を場面や状況に応じて使い分けながら、相手の気持ちや考え、思いなどを伝え合う経験を積み重ねる必要もある。したがって、児童生徒の発達段階に合った言語活動の場を設定し、英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」

「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことも不可欠である。

もちろん、外国語に初めて触れる小学生にとって、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を同時に習得させることは大きな負担となる。そこで、第1学年から「小学校英語科」を導入することで、段階的に系統的に学習できるように考えた。そのためのカリキュラムや指導方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進める必要がある。これが研究の第1の目的である。

「小学校英語科」を導入し、6年間を通して培われたコミュニケーション能力の素地を十分に生かすためには、中学校の英語の授業はどうあるべきなのか、指導方法を含めて見直していく。これが、研究の第2の目的である。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション能力を育成するには、小学校、中学校それぞれ単独に行われればよいのではない。学習者の学びの一貫性を考えれば、小学校と中学校が指導内容の連続を図り指導方法に一貫性をもたせ、系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。そのためにも、まず、指導方法や内容を共有したり、協力して指導にあたるなどの教師間交流、児童生徒の学びの様子を通じて互いの学習内容を把握したり、児童生徒の言語習得への動機付けを図るための児童生徒間交流の在り方を研究することで、英語教育における小学校と中学校の円滑な接続を図ることが今、何よりも求められている。これが研究の第3の目的である。

第4の目的は、児童生徒のコミュニケーション能力を高めるための指導方法として、学びの場におけるICT活用である。様々な学校種、子どもたちの発達段階を考慮して、一人一台の情報端末や電子黒板、無線LAN等が整備された環境において、デジタル教科書・教材を活用した教育の効果・影響の検証、指導方法の開発、モデル・コンテンツの開発等を行う実証的研究をしていく。

## (2) 研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は、小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに、中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、小・中学校の効果的な連携を図る中で、ICT機器の活用や、仲間との協働学習を効果的に導入しながら、4技能を総合的に育成することで向上する。

## (3) 研究内容

- ① 新教科「小学校英語科」を導入し、カリキュラム開発を行う
  - (ア) 小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - (イ) 中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究
  - (ウ) 小学校卒業時のCAN-DOリストの作成
- ② 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり
  - (ア) 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり
  - (イ) 自らの学びを確認し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材づくり
  - (ウ) 時間や空間を超えて相手とつながること楽しさを実感することによる主体的態度の育成
- ③ 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」
  - (ア) 空間を超えて人とつながる環境（スカイプ、E-mail、インターネット）
  - (イ) 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（インターネット）
  - (ウ) 音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）
- ④ 効果的な小中連携の在り方
  - (ア) 効果的な小中の情報交換の在り方

(イ)教師間交流、児童生徒間交流の在り方

(ウ)効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

#### (4) 必要となる教育課程の特例

小学校：新教科「小学校英語科」の新設

第1学年及び第2学年は週0.5時間、年間17時間設定する。各教科から時数をあてる。

第3学年から第6学年は週1時間、年間35時間設定する。

第3学年及び第4学年は各教科、総合的な学習の時間から時数をあてる。

第5学年及び第6学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容等

- ①小学校に教科「小学校英語科」を新設し、その目標設定の在り方についての研究
- ②教科「小学校英語科」における評価の在り方の研究
- ③児童の発達段階に応じて4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムの開発
- ④コミュニケーションを支える文法指導の在り方の研究
- ⑤小学校と中学校の円滑な接続のための教師間交流、児童生徒間交流の在り方についての研究
- ⑥中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、その指導内容や指導計画について研究
- ⑦高等学校の英語教育との接続を意識した中学校英語の在り方の研究
- ⑧英語学習における「学びのイノベーション」の活用
- ⑨「わくわく！スノーマン・プロジェクト」を立ち上げ、その効果を分析

### (2) 教育課程の内容は適切であったか

英語は繰り返し口にしながら自然と慣れ親しむことが大切であり、特に低学年時には物とのイメージと英語の音を一致させる必要があると言われる。特に、数字や色、挨拶などの基本的語彙や表現は、低学年から英語を導入することにより、毎回の授業の中で繰り返され、自然と定着している様子が伺えた。

札幌小では従前より1年生から英語活動を導入し、基本的な表現については繰り返し指導している。例えば数の表現は、その発達段階に応じて表現方法を豊かにしながらスパイラルに学べるようにカリキュラムを工夫しており、なじみのある表現に新しい表現を組み合わせたコミュニケーションの場面を設定することで、児童のコミュニケーション能力が向上しているという報告がされている。

函館小も1年生段階で、名前をALTに伝える活動を通じて、子どもたちがコミュニケーションを図る楽しさを味わい、英語が言えたという達成感だけではなく、ALTへの親しみを感じるようになったという報告がある。

また、歌やゲームを通じて体験的に慣れ親しませることを主眼とする「Hi, friends!」の内容は、小学校3年生～5年生前半を対象としたときに最も効果的であるということがわかってきている。英語に対する苦手意識や羞恥心が少ない中学年の子どもは、英語特有の発音やリズムも一生懸命に真似て活動に浸ることができるからである。

5年生後半から6年生にかけては、知的好奇心を満足させるためにも、文字を導入することが望ましいと考えている。旭川小の報告では、授業の中での文字の導入の効果として、「英語の音声とともに文字を目にすることで、英語に一層興味をもつことができる」「2語以上のフレーズを児童に聞かせる際、イラストに文字を添えることで、後から英文を思い出す際の手がかりが増える」「中学校英語の文字指導の素地を養うことができる」という報告がされている。

中学校では現行の教育課程の枠内ではあるが、中学校1年生の英語の授業の一部（年35時間）を「スパイラルタイム」と設定し、小学校英語科と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指した内容を検討中である。この「スパイラルタイム」は、**content-based**を意識して、英語をツールとして、自分の考えを表現したり、相手の考えを受け入れたりしながら、相手とのつながりを意識して活動する時間である。この時、小学校で学んだ内容を想起させ、スパイラルに学び直すことにより、生徒の英語力が向上することがわかってきている。また、教師間交流や児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る時間としても設定でき、生徒の英語学習へのモチベーションを高めることにも有効である。

旭川中では、スパイラルタイムを授業の前半に帯時間として設定し、「Hi, friends!」で扱われている言語材料等を用いて言語活動を行わせ、その後、本時の文構造の定着につなげている。これにより小学校で慣れ親しんだ表現を想起させることができること、中学校の習得の順序にこだわらないため豊かな言語活動ができること、文構造に応じた場面や機能に着目させながら活動することができるからである。

### （3）授業時間等についての工夫

授業時数については、計画では各教科から時数をあてるとしていたが、今年度は余剰時間を利用して行った。今後さらに検討が必要である。

### （4）指導方法の適切性

#### ① CSSの導入(Creative Situational Skit)

- ・基本的な skit を与え、その skit がどんな場面で使われるか、状況や人物、心の動き等を含めてグループで考えながら skit を完成させ、グループで演じさせた。

（例）教師の発問「どんな場面なのか考えよう」 A: What's this? B: It's a ~ .

→コミュニケーションにおいては、言語はある場面において具体的な働きを果たすために使用されるものであることを子どもたちに理解させるために有効な手立てであった。

#### ② Paraphrasing の積極的利用

- ・自分が伝えたい語彙が想起できないときや相手が理解できないときに、それに代わる語彙を使って表現する能力を高めることで、コミュニケーション能力の一層の向上と語彙の定着を図った。

→パラフレーズの手法は、毎回の授業の中で、その意識を加えるだけでよい。例えば、ALTの英語を日本語に翻訳するのではなく、パラフレーズすることで理解させたり、子どもからALTへのスリーヒントクイズの形で行わせたりすることも可能である。小学校低学年ではジェスチャーを使わせたり、中学年では子ども同士のクイズを実施させたり、高学年ではスピーチの際に難しい単語を使わず、または使ったとしても直後にみんなに分かる英語で言い直すなどの指導を加えていくことにより、パラフレーズする力が養われていくことがわかった。

#### ② スノーマン・プロジェクトの開始

- ・子どもたちに言語や文化への体験的な理解と4技能の統合的な能力を育成する学習活動として、ピクトフォリオづくりを実践する。子どもが表現活動の際に調べた英語の単語や表現を、子ども自身の絵と組み合わせてカードにし、ウェブ上にアップロードして、蓄積型発展教材（スノーマン）をつくっていく。8附属の小中の子どもたちがそれぞれに作成したカードは、雪だるまのようにどんどん大きくなっていき、いつでも、誰でも、どこからでもアクセスできるデータベースとなっていく。子どもの自発的な調べ学習として利用したり、教師が教材として使用したりすることができる。

→現在、テスト稼働中である。子どもの興味・関心を引くにはよいプロジェクトである。

#### ④ タブレット型端末の利用

- ・個別学習としての利用（小学校）

タブレット型端末による個別学習により、自分が必要とする語彙を、児童が自分のレベルやペースにあわせて練習することができる。過去の LL 教室で行っていたことが、教室でのタブレット端末によって可能となる。また、調べ学習としても活用できる。

・どきどき！英語変換チャレンジ（中学校）

siri（音声認識機能）を利用して、実際に iPad に向かって英語を発声し、正しく変換されるか挑戦してみる。これによって、特に音声面での意欲を高めることができる。釧路中では、実施後の生徒アンケートから「今後さらにより良い英語の発音を身に付けたいと思った」という項目が高かったことを報告している。（満点 4 平均値 3.78）

→個別学習時におけるタブレット型端末の利用は、様々に考えられる。この時、その効果とともに指導場面と指導方法が合致していると大変効果的である。習熟度に応じての学びの可能性も広がる。一方、集団の機能を生かした学びにはならない場合があるため、その使用方法については検討の余地がある。また、siri の利用は、生徒の意欲向上には大変効果的であった。しかし、あくまでも機械判定であるため、音声の一面的な判定にしか過ぎないことに留意する必要がある。

⑤ 6者交流授業の実施（小・中・大学教員、小・中・大学生）

- ・小学生と中学生の合同授業の実施。
- ・小学校同士、中学校同士の交流授業の実施。
- ・大学生と小学生、中学生との交流他

→英語が人と人をつなぐツールであることを認識させるためには、閉じられた教室空間・人間関係だけでは十分ではない。そのため、様々な人と英語をツールとしてつながる経験が何よりも大切であり、効果的である。ただし、例えば校種が違う場合など、ねらいの摺り合わせが最も大切となり、それがあいまいであると単なるイベントに終わる可能性がある。

⑥ CAN-DO リストの活用

- ・小学校時代にどんな活動をしてきたのか、また、取り組んできたことがどの程度理解され、使えるのかということをも CAN-DO リストを使った見取りの中で把握し、中学校でのスパイラルタイムの指導計画に生かす。これにより、指導の目標が見え、実態を把握できることで集中的に指導することができ、学習者の英語の能力差を解消に役立てることができる。

旭川中では、スパイラルタイムでのオリエンテーション後には、CAN-DO リストの項目について、3～5割の生徒が「ややわかる」から「だいたいわかる」へ、「だいたいわかる」から「大丈夫である」というように、良い変化が現れたと報告されている。

→中学入学時の早い時期から、複数の小学校から入学してくる生徒の英語の運用能力を統一したラインで図ることができ、その後の指導計画に反映することができ有効である。

⑦ dictogloss 的手法の導入

- ・”Focus on meaning”主体の学習活動を取り入れる。自然な口調で話されるまとまりのある英語を聞いて、概要や要点を聴き取り、そのメモをもとに仲間と協力して英文を再生していく活動である。

→小学校英語科とのつながりを意識し、「意味内容そのものに対する問い」を生むと同時に、中学生らしい英語表現の高まりを意識し、文法規則など「言語そのものに対する問い」を生むことができる。意味のある、かつ、取得したいと思う情報を与えられたときに、学習者は、仲間と協力して語彙や文構造に着目し、理解を深めると同時に、モニタリング能力の向上が図られる。

(5) 小学校英語科の目標と内容（検討例）

低学年（小学校1年生、2年生）

目標：言語や文化について体感的に理解を深め、積極的に自分のことを表現しようとする態度の育成

を図り、外国語の音声や日常的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

中学年（小学校3年生、4年生）

目標：言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

高学年（小学校5年生、6年生）

目標：言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の素地を養う。

## (6) 研究の経過

年次	研究推進内容
＜第一年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3) 新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4) 新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5) 新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施 (7) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」実施 (10) 「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (12) 評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討
＜第二年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 小学校第1学年からの「小学校英語科」の実施 (3) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (4) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (5) 1年次研究成果の評価／中学校英語の目標再設定 (6) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7) 「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8) 「スパイラルタイム」の実践 (9) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (10) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (11) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第三年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し (3) 小学校に習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定 (4) 中間評価（成果の確認と修正） (5) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (6) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (7) 接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」継続 (10) 「スパイラルタイム」の実践継続 (11) 文字習得状況調査（中学1年・5月）の実施 (12) 児童生徒実態調査（関心・意欲・態度）の実施と研究へのフィードバック (13) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第四年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議（年4回） (2) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続／海外との交流活動 (3) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続（年4回） (4) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成 (5) 研究の成果と効果の検証



(7) 評価に関する取組

年次	評価推進内容
<第一年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校6年生) (3) 学力テストをもちいた英語力の診断 (8月 中学校1年生) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第二年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第三年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第四年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにした4年間の成果の検証 (11月)

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### 1 児童・生徒への効果

札幌小では、4年生において、昨年度まで2週に1度20分程度の英語活動であったが、週1回45分の授業になったことを喜ぶ声は非常に多いと報告されている。

旭川小からは、言語活動を日常の生活と密接に関連させることにより、児童の英語力が向上するとの報告がある。週一度お弁当の日があることから、翌週のお弁当で食べたい自分だけのリクエストランチを英語で発表する活動を設定し、保護者に協力を依頼し実際に作ってもらうこととした。これにより、必要感をもって取り組んだという。

釧路小では、スノーマン・プロジェクトにつながるピクトフォリオ作成に取り組んだ。自分のイメージと英語を組み合わせることで、慣れ親しみの段階から定着へと深まった。

札幌中では、1年生のオリエンテーション時におけるスパイラルタイムで、外国語活動を想起させる自己紹介活動に取り組ませることにより、生徒が意欲的に活動し、相手の好きな物について驚いたり共感したりしながら、情報のやりとりを行っていたとの報告がある。また、慣れ親しんできた表現を想起させることにより、豊富な語彙と発音に対する意識の高さを引き出すことができたと報告されている。

釧路中では、日々の授業の学習案において、外国語活動との関連を洗い出し、想起させながら中学生らしい知的好奇心を高める活動となるよう工夫しているが、小学校時代よりも英語が好きであると答える生徒が増えたとの報告がある。外国語活動で扱われた表現は音声から導入し、確認として文字による可視化を図ることにより、定着度合いが増えるという。

旭川中からは、CAN-DOリストの利用により、自分がどのような表現を使えるようになったかと振り返り、次の活動への見通しが立つようになったとの報告がある。これにより、テーマを定めてのスピーチ原稿も、15分間で平均83.2語と表現能力が上がっている。

函館小・中では、小中合同授業にチャレンジし、小学生は「普段接することのない仲間にも英語で伝えることができることを実感したり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりしながら、学習へ

の意欲をいっそう高めることができた。」「協同学習の価値に気付き、人とのかかわりを大切にすることができた。」と報告があった。中学生は小学生に負けられないということで学習への意欲的な取組が見られたと報告がある。小学生が思わず日本語を使用すると、中学生がすかさず”In English, please.”と促すなど、中学生らしくリードする姿も見られた。ねらいの設定、小中の教師の綿密な打ち合わせ等苦労は多いが、児童生徒のモチベーションの向上には大いに役立った。

## 2 教師への効果

小学校1年生からの導入を図ることにより、小学校教員全員が英語に関わることとなり、学校全体として英語をどう位置づけ、どう指導していくかという論議が生まれるようになる。また、研究を積極的にすすめることにより、児童がより一層楽しく活動するようになり、その姿によって教師の指導意欲も高まってきた。

中学校においては、教育課程内ではあるものの、年140時間の英語の時数のうち35時間を「スパイラルタイム」と名付けて、小学校英語科との接続を意識したり、英語をツールとして使用しながら、子どもたちが自分のことを表現したり、相手のことを理解することにひたる時間として設定した。これにより、コミュニケーション能力の向上とともに学習意欲が高まってきている。

## 3 保護者等への効果

保護者の期待感は大い。特に、グローバル社会を生きていく子どもたちにとって、情報と英語は大切な資質能力であると認識されているようである。

また、英語を教科として導入するのは、子どものより一層のコミュニケーション能力の育成のためであり、発達段階に応じて子どもの興味・関心を引きだす指導を研究するためであるとの趣旨には納得していただいているところである。

### (2) 実施上の問題点と今後の課題

小学校のカリキュラムについては現在検討段階である。今回8附属が共同して研究にあたりカリキュラム開発を行っているが、それぞれ地域の特殊性もあるために、摺り合わせに時間がかかっているためである。特に、中学校と違い、小学校では担任が授業を行うために校内での調整も時間を要する。さらに、北海道はその広大さ故に、会議を一つ開くことも容易ではない。また、地域性が強く、同じカリキュラムを使用できるわけではないために、整理が必要となる。その分、汎用性のあるカリキュラムを作成できるというメリットもある。

最近小中連携の重要性が叫ばれており、英語という教科は小中連携の切り札となり得る側面がある。しかし、一方、研究を進めていく上で、単純に連携すればよいものではないこともわかってきた。小中それぞれの授業には目標やねらいがあり、そのねらいを摺り合わせていくことが最も大切であり、それには時間がかかることである。

また、評価をどうするかという点も小学校英語科では大切な議論のポイントである。数値ではあらず、よい点を記述することが望ましいことはプロジェクト内でも異論はないが、その評価規準については今後検討していく必要がある。

さらに、小学校英語科が導入されることにより、中学校の指導をどう変化させていくかということが来年度以降の課題である。教育課程が変わらない以上、その指導項目は変わらず、従って評価規準も変わらないとも言えるが、小学校英語科で育ってきた子どもの姿を確かめながら、内容を深化させていく必要がある。生徒の言語運用能力をどこまで高めていくか、来年度以降検討していく予定である

## 北海道教育大学附属札幌小学校（外 3 小学校） 教育課程表（平成 26 年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的学習の時間	特別活動	英語科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第 1 学年	300 (-6)		133 (-3)		100 (-2)	66 (-2)	66 (-2)		100 (-2)	34			34	17 (+17)	850 (0)
第 2 学年	309 (-6)		172 (-3)		103 (-2)	68 (-2)	68 (-2)		103 (-2)	35			35	17 (+17)	910 (0)
第 3 学年	235 (-10)	67 (-3)	172 (-3)	87 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	945 (0)
第 4 学年	235 (-10)	87 (-3)	172 (-3)	102 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	980 (0)
第 5 学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
第 6 学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
計	1429 (-32)	359 (-6)	999 (-12)	399 (-6)	203 (-4)	346 (-12)	346 (-12)	115	587 (-10)	209	0 (-70)	270 (-10)	209	174 (+174)	5645 (0)

※授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

・新教科（英語）では、他教科で扱う内容についてその一部を扱うこととし、減時数分の内容を担うこととする。

例えば、国語で担っている話すこと・聞くことのうちのコミュニケーションの基礎、算数における数の基本や図形、時間、音楽における歌唱やリズム遊び、図画工作における造形活動、体育における身体表現、生活科における遊びや学校で働く人たち、理科における動植物の名前、社会科における地域の地名やお店の仕事などの内容である。

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属札幌小学校 校長 戸田 まり

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-10

電話 011-778-0471

FAX 011-778-0640

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
67	2	69	2	74	2	80	2	76	2	73	2	439	12
3		1	1	2		3	1	4		3	1	16	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1	11
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	4	0	29						

## 2 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成20年度～平成22年度 学力の把握に関する研究指定校(図工)

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

平成25年度

研究開発実施報告書

～第1年次～

北海道教育大学附属札幌小学校  
外7校

## 平成25年度研究開発学校実施報告書

### 1 研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力を育成するため、小学校に新教科を導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究開発

### 2 研究の概要

小学校第1学年から新教科「小学校英語科」を導入し、国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニケーション能力と積極的な態度の育成を目指す。具体的には、

- ①「小学校英語科」の情意面及び技能面での目標と評価の在り方
- ②4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムや文法指導の在り方
- ③小中の教師間交流、児童生徒間交流、カリキュラム連携の在り方

を研究する。

中学校では、英語の時間の一部を小学校との継続的な指導の時間にあてる「スパイラルタイム」として教育課程内に設定し、英語科における指導計画と指導方法の見直しを研究する。

さらに、英語学習における「学びのイノベーション」を目指し、ICT 機器を利用した個別学習、遠方の仲間や海外の子どもたちとの英語を介した協働学習や交流学习の在り方を研究するとともに、その成果を、いつでもどこからでも誰にでも利用できる蓄積発展型教材としてウェブ上でデータベース化し、その効果的活用を図るための指導方法や評価方法をあわせて開発する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 現状の分析と研究の目的

外国語活動が小学校第5学年から導入されたことによる望ましい変化として、「聞く力」が高まっていることを実感している中学校教師は多い。また、英語の発音がよくなっている、語彙が増えている、授業時におけるアクティビティに積極的であるなど、音声面や意欲面での向上も報告されている。

このように外国語活動の導入により、小学生のコミュニケーション能力の素地の育成がなされているが、小学生でも高学年であれば、音声だけではなく、学んだ表現を文字で書いてみたい、書かれている英文を読んでみたい等の知的好奇心が芽生える児童も出てくる。

英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査(平成22年10月 文部科学省国際教育課外国語教育推進室)によれば、「英語の授業で楽しいと思うこと」という設問に対し、「英語の文字や単語を読むこと」と答えた児童は小学校6年生で55.1%、「英語の文字や単語を書くこと」と答えた児童は53.4%にあがる。学習者の知的欲求が、「読むこと」「書くこと」につながっていると思われる。

国際社会において主体的に活躍するためには外国語を運用する能力が必須であるが、その根幹となるのは、異文化への関心であり、異文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図りたいという意欲である。その意味において、現状の外国語活動は、コミュニケーション意欲の向上に大きく寄与している。しかし、一方、コミュニケーション能力の育成のためには、言語や非言語のあらゆる手段を場面や状況に応じて使い分けながら、相手の気持ちや考え、思いなどを伝え合う経験を積み重ねる必要もある。したがって、児童生徒の発達段階に合った言語活動の場を設定し、英語の語彙・表現を活用しながら「聞くこと」

「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力の基礎を養うことも不可欠である。

もちろん、外国語に初めて触れる小学生にとって、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を同時に習得させることは大きな負担となる。そこで、第1学年から「小学校英語科」を導入することで、段階的に系統的に学習できるように考えた。そのためのカリキュラムや指導方法、中学校との円滑な接続の在り方についての研究を進める必要がある。これが研究の第1の目的である。

「小学校英語科」を導入し、6年間を通して培われたコミュニケーション能力の素地を十分に生かすためには、中学校の英語の授業はどうあるべきなのか、指導方法を含めて見直していく。これが、研究の第2の目的である。

児童生徒の外国語によるコミュニケーション能力を育成するには、小学校、中学校それぞれ単独に行われればよいのではない。学習者の学びの一貫性を考えれば、小学校と中学校が指導内容の連続を図り指導方法に一貫性をもたせ、系統だったカリキュラム連携を考慮する必要がある。そのためにも、まず、指導方法や内容を共有したり、協力して指導にあたるなどの教師間交流、児童生徒の学びの様子を通じて互いの学習内容を把握したり、児童生徒の言語習得への動機付けを図るための児童生徒間交流の在り方を研究することで、英語教育における小学校と中学校の円滑な接続を図ることが今、何よりも求められている。これが研究の第3の目的である。

第4の目的は、児童生徒のコミュニケーション能力を高めるための指導方法として、学びの場におけるICT活用である。様々な学校種、子どもたちの発達段階を考慮して、一人一台の情報端末や電子黒板、無線LAN等が整備された環境において、デジタル教科書・教材を活用した教育の効果・影響の検証、指導方法の開発、モデル・コンテンツの開発等を行う実証的研究をしていく。

## (2) 研究仮説

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は、小学校において新教科「小学校英語科」を導入するとともに、中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、小・中学校の効果的な連携を図る中で、ICT機器の活用や、仲間との協働学習を効果的に導入しながら、4技能を総合的に育成することで向上する。

- ① 「小学校英語科」を新設し、小学校第1学年から英語を導入することで、言語や文化についての体験的な理解と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視しながら、「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を総合的に育むことにより、国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力を育成することができる。
- ② 小学校で培った英語によるコミュニケーション能力が中学校でも引き継がれるよう、中学校において英語の授業の一部に「スパイラルタイム」を設定し、指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し、教師間交流、児童生徒交流を中心とした効果的な連携を図ることで、生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識が高まり、コミュニケーション能力が向上する。
- ③ 国際社会において主体的に活躍するために求められる、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図る態度は、「学びのイノベーション」としてICT機器を積極的に活用し、遠方に住む子どもや異文化の子どもたちとの協働学習を通じて育まれる。また、学習成果を蓄積型発展教材としてデータベース化する「わくわく！スノーマン・プロジェクト」は、子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり、他者との協働学習による学びの広がりを実感させ、英語学習の動機付けと異文化理解を促す契機となり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。

### (3) 研究内容

- ① 新教科「小学校英語科」を導入し、カリキュラム開発を行う
  - (ア) 小学校新教科「小学校英語科」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - (イ) 中学校「スパイラルタイム」における指導方法と指導内容の在り方についての研究
  - (ウ) 小学校卒業時の CAN-DO リストの作成
- ② 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり
  - (ア) 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり
  - (イ) 自らの学びを確認し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材づくり
  - (ウ) 時間や空間を超えて相手とつながること楽しさを実感することによる主体的態度の育成
- ③ 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」
  - (ア) 空間を超えて人とつながる環境（スカイプ、E-mail、インターネット）
  - (イ) 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（インターネット）
  - (ウ) 音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）
- ④ 効果的な小中連携の在り方
  - (ア) 効果的な小中の情報交換の在り方
  - (イ) 教師間交流、児童生徒間交流の在り方
  - (ウ) 効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

### (4) 必要となる教育課程の特例

小学校：新教科「小学校英語科」の新設

第1学年及び第2学年は週0.5時間、年間17時間設定する。各教科から時数をあてる。

第3学年から第6学年は週1時間、年間35時間設定する。

第3学年及び第4学年は各教科、総合的な学習の時間から時数をあてる。

第5学年及び第6学年は外国語活動の時間の時数をあてる。

### (5) 研究成果の評価方法

- ① 測定方法
  - (ア) 小学校卒業時における児童英検 GOLD グレードレベルの調査の実施  
小学校卒業時に、「日本英語検定協会」主催の児童英検 GOLD グレードクラスの学力が身に付いているかどうか評価する。 (研究仮説①③の測定)
  - (イ) 中学校英語学習初期の段階における文字習得状況調査  
文字を取り扱わない小学校外国語活動で学んできた生徒と「書くこと」を取り入れた小学校英語科で学んできた生徒の文字習得状況の違いを、中学校入学後2ヶ月を経た段階での単語テストにより調査する。 (研究仮説①③の測定)
  - (ウ) 児童生徒へのアンケートによる評価  
「小学校英語科」「スパイラルタイム」の学習者の心理面への効果を、コミュニケーションへの意欲や言語や文化への関心の点からアンケート調査する。 (研究仮説①②③の測定)
  - (エ) 中学校における発表力・表現力の状況調査  
現行中学校英語教科書には、「発表しよう」「紹介しよう」「スピーチしよう」などの、英語によるプレゼンテーションを扱った題材が多く見られる。英語によるプレゼンテーション活動の状況を通じて、発表姿勢や意欲、使用される表現において、どのような力が付いているかを調査する。 (研究仮説①②③の測定)



## ② 見取りの方法

### (ア) 振り返りカードによる評価

授業終了時には、児童生徒一人一人に対して「振り返りカード」を記入させる。これは授業や活動への気づきを児童生徒自身が記入するものである。小学校1年から中学校3年生まで継続的に記録して、変化の様子や学習の深まりを比較する。(研究仮説①②の見取り)

### (イ) ポートフォリオとしてのピクトフォリオによる評価

児童生徒一人一人がそれぞれのピクトフォリオを作成し、デジタルコンテンツ化して、ウェブ上にアップロードする。アップロードの際、教師がこのピクトフォリオを事前にチェックして、児童生徒の英語力の向上を調査する。(研究仮説③の見取り)

### (ウ) アンケートによる評価

発達段階に応じて「英語への関心・意欲」についてのアンケートを行い、児童生徒の興味・関心のポイントを検証し、授業内容の改善に役立てる。(研究仮説①②③の見取り)

## ③ プロジェクトの評価

### (ア) 北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクトによる検討(内部評価)

振り返りカードやアンケート、各種調査による検討を行い、授業の方向性や改善点を検討する。また、本学大学教員による児童・生徒の英語力の分析、教師による授業分析を行い、授業改善に生かしていく。

### (イ) 北海道教育大学附属小・中学校英語プロジェクト評価委員会による検討(外部評価)

評価委員会(文部科学省、北海道教育委員会、札幌市教育委員会関係者で構成予定)を立ち上げ、本研究に対して評価していただき、プロジェクト全体の改善に生かす。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容等

- ①小学校に教科「小学校英語科」を新設し、その目標設定の在り方についての研究
- ②教科「小学校英語科」における評価の在り方の研究
- ③児童の発達段階に応じて4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムの開発
- ④コミュニケーションを支える文法指導の在り方の研究
- ⑤小学校と中学校の円滑な接続のための教師間交流、児童生徒間交流の在り方についての研究
- ⑥中学校の英語の時間の一部に「スパイラルタイム」を設定し、その指導内容や指導計画について研究
- ⑦高等学校の英語教育との接続を意識した中学校英語の在り方の研究
- ⑧英語学習における「学びのイノベーション」の活用
- ⑨「わくわく!スノーマン・プロジェクト」を立ち上げ、その効果を分析

### (2) 教育課程の内容は適切であったか

英語は繰り返し口にしながら自然と慣れ親しむことが大切であり、特に低学年時には物とのイメージと英語の音を一致させる必要があると言われる。特に、数字や色、挨拶などの基本的語彙や表現は、低学年から英語を導入することにより、毎回の授業の中で繰り返され、自然と定着している様子が伺えた。

札幌小では従前より1年生から英語活動を導入し、基本的な表現については繰り返し指導している。例えば数の表現は、その発達段階に応じて表現方法を豊かにしながらスパイラルに学べるようにカリキュラムを工夫しており、なじみのある表現に新しい表現を組み合わせたコミュニケーションの場面を設定することで、児童のコミュニケーション能力が向上しているという報告がされている。

函館小も1年生段階で、名前をALTに伝える活動を通じて、子どもたちがコミュニケーションを図る楽しさを味わい、英語が言えたという達成感だけではなく、ALTへの親しみを感じるようになったという報告がある。

また、歌やゲームを通じて体験的に慣れ親しませることを主眼とする「Hi, friends!」の内容は、小学校3年生～5年生前半を対象としたときに最も効果的であるということがわかってきている。英語に対する苦手意識や羞恥心が少ない中学年の子どもは、英語特有の発音やリズムも一生懸命に真似て活動に浸ることができるからである。

5年生後半から6年生にかけては、知的好奇心を満足させるためにも、文字を導入することが望ましいと考えている。旭川小の報告では、授業の中での文字の導入の効果として、「英語の音声とともに文字を目にすることで、英語に一層興味をもつことができる」「2語以上のフレーズを児童に聞かせる際、イラストに文字を添えることで、後から英文を思い出す際の手がかりが増える」「中学校英語の文字指導の素地を養うことができる」という報告がされている。

中学校では現行の教育課程の枠内ではあるが、中学校1年生の英語の授業の一部(年35時間)を「スパイラルタイム」と設定し、小学校英語科と指導方法や学習内容の一貫性や共通性を目指した内容を検討中である。この「スパイラルタイム」は、content-basedを意識して、英語をツールとして、自分の考えを表現したり、相手の考えを受け入れたりしながら、相手とのつながりを意識して活動する時間である。この時、小学校で学んだ内容を想起させ、スパイラルに学び直すことにより、生徒の英語力が向上することがわかってきている。また、教師間交流や児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図る時間としても設定でき、生徒の英語学習へのモチベーションを高めることにも有効である。

旭川中では、スパイラルタイムを授業の前半に帯時間として設定し、「Hi, friends!」で扱われている言語材料等を用いて言語活動を行わせ、その後、本時の文構造の定着につなげている。これにより小学校で慣れ親しんだ表現を想起させることができること、中学校の習得の順序にこだわらないため豊かな言語活動ができること、文構造に応じた場面や機能に着目させながら活動することができるからである。

### (3) 授業時間等についての工夫

授業時数については、計画では各教科から時数をあてるとしていたが、今年度は余剰時間を利用して行った。今後さらに検討が必要である。

### (4) 指導方法の適切性

#### ① CSSの導入(Creative Situational Skit)

- 基本的なskitを与え、そのskitがどんな場面で使われるか、状況や人物、心の動き等を含めてグループで考えながらskitを完成させ、グループで演じさせた。

(例) 教師の発問「どんな場面なのか考えよう」 A: What's this? B: It's a ～ .

→コミュニケーションにおいては、言語はある場面において具体的な働きを果たすために使用されるものであることを子どもたちに理解させるために有効な手だてであった。

#### ② Paraphrasingの積極的利用

- 自分が伝えたい語彙が想起できないときや相手が理解できないときに、それに代わる語彙を使って表現する能力を高めることで、コミュニケーション能力の一層の向上と語彙の定着を図った。

→パラフレーズの手法は、毎回の授業の中で、その意識を加えるだけでよい。例えば、ALTの英語を日本語に翻訳するのではなく、パラフレーズすることで理解させたり、子どもからALTへのスリーヒントクイズの形で行わせたりすることも可能である。小学校低学年ではジェスチャーを使わせたり、中学年では子ども同士のクイズを実施させたり、高学年ではスピーチの際に難しい単語を使わず、また

は使ったとしても直後にみんなに分かる英語で言い直すなどの指導を加えていくことにより、パラフレーズする力が養われていくことがわかった。

### ③ スノーマン・プロジェクトの開始

- ・子どもたちに言語や文化への体験的な理解と4技能の統合的な能力を育成する学習活動として、ピクトフォリオづくりを実践する。子どもが表現活動の際に調べた英語の単語や表現を、子ども自身の絵と組み合わせてカードにし、ウェブ上にアップロードして、蓄積型発展教材（スノーマン）をつくっていく。8附属の小中の子どもたちがそれぞれに作成したカードは、雪だるまのようにどんどん大きくなっていき、いつでも、誰でも、どこからでもアクセスできるデータベースとなっていく。子どもの自発的な調べ学習として利用したり、教師が教材として使用したりすることができる。

→現在、テスト稼働中である。子どもの興味・関心を引くにはよいプロジェクトである。

### ④ タブレット型端末の利用

- ・個別学習としての利用（小学校）

タブレット型端末による個別学習により、自分が必要とする語彙を、児童が自分のレベルやペースにあわせて練習することができる。過去のLL教室で行っていたことが、教室でのタブレット端末によって可能となる。また、調べ学習としても活用できる。

- ・どきどき！英語変換チャレンジ（中学校）

siri（音声認識機能）を利用して、実際にiPadに向かって英語を発声し、正しく変換されるか挑戦してみる。これによって、特に音声面での意欲を高めることができる。釧路中では、実施後の生徒アンケートから「今後さらにより良い英語の発音を身に付けたいと思った」という項目が高かったことを報告している。（満点4 平均値3.78）

→個別学習時におけるタブレット型端末の利用は、様々に考えられる。この時、その効果とともに指導場面と指導方法が合致していると大変効果的である。習熟度に応じての学びの可能性も広がる。一方、集団の機能を生かした学びにはならない場合があるため、その使用方法については検討の余地がある。また、siriの利用は、生徒の意欲向上には大変効果的であった。しかし、あくまでも機械判定であるため、音声の一面的な判定にしか過ぎないことに留意する必要がある。

### ⑤ 6者交流授業の実施（小・中・大学教員、小・中・大学生）

- ・小学生と中学生の合同授業の実施。
- ・小学校同士、中学校同士の交流授業の実施。
- ・大学生と小学生、中学生との交流他

→英語が人と人とをつなぐツールであることを認識させるためには、閉じられた教室空間・人間関係だけでは十分ではない。そのため、様々な人と英語をツールとしてつながる経験が何よりも大切であり、効果的である。ただし、例えば校種が違う場合など、ねらいの摺り合わせが最も大切となり、それがあいまいであると単なるイベントに終わる可能性がある。

### ⑥ CAN-DO リストの活用

- ・小学校時代にどんな活動をしてきたのか、また、取り組んできたことがどの程度理解され、使えるのかということをもCAN-DOリストを使った見取りの中で把握し、中学校でのスパイラルタイムの指導計画に生かす。これにより、指導の目標が見え、実態を把握できることで集中的に指導することができ、学習者の英語の能力差を解消に役立てることができる。

旭川中では、スパイラルタイムでのオリエンテーション後には、CAN-DOリストの項目について、3～5割の生徒が「ややわかる」から「だいたいわかる」へ、「だいたいわかる」から「大丈夫である」というように、良い変化が現れたと報告されている。

→中学入学時の早い時期から、複数の小学校から入学してくる生徒の英語の運用能力を統一したライン

で図ることができ、その後の指導計画に反映することができ有効である。

#### ⑦ dictogloss 的手法の導入

- ・”Focus on meaning”主体の学習活動を取り入れる。自然な口調で話されるまとまりのある英語を聞いて、概要や要点を聴き取り、そのメモをもとに仲間と協力して英文を再生していく活動である。
- 小学校英語科とのつながりを意識し、「意味内容そのものに対する問い」を生むと同時に、中学生らしい英語表現の高まりを意識し、文法規則など「言語そのものに対する問い」を生むことができる。意味のある、かつ、取得したいと思う情報を与えられたときに、学習者は、仲間と協力して語彙や文構造に着目し、理解を深めると同時に、モニタリング能力の向上が図られる。

#### (5) 小学校英語科の目標と内容（検討例）

低学年（小学校1年生、2年生）

目標：

言語や文化について体感的に理解を深め、積極的に自分のことを表現しようとする態度の育成を図り、外国語の音声や日常的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

育てようとする資質・能力：

##### 【聞くこと】

- ・アルファベットを聞いて、違いを判別することができる。
- ・日常のあいさつを理解することができる。(Good morning.など)
- ・日常生活の身近な数字を聞き取ることができる。(1～10 まで)
- ・色を表す英語を聞いて、その色をさすことができる。(red, blue など)
- ・曜日を聞いて、その曜日を理解することができる。
- ・動物を表す英語を聞いて、その動物の絵を指すことができる。(dog, cat など)

##### 【話すこと】

- ・英語特有の音やリズム、イントネーションで発音することができる。
- ・アルファベットを順番に言うことができる。
- ・初歩的な英語の歌を聞いて、真似て歌うことができる。
- ・場面にあわせて、日常のあいさつを言うことができる。(Good morning.など)
- ・日常生活の身近な数字を言うことができる。(1～10 まで)
- ・色を見て、その色を言うことができる。(red, blue など)
- ・曜日を言うことができる。
- ・動物の絵を見て、その動物の名前を英語で言うことができる。(dog, cat など)

中学年（小学校3年生、4年生）

目標：

言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

育てようとする資質・能力：

##### 【聞くこと】

- ・アルファベットを聞いて、どの文字かを理解することができる。
- ・日付や曜日を聞き取ることができる。(Good morning.など)
- ・日常生活の身近な数字を聞き取ることができる。(1～100 まで)
- ・日常的なあいさつを聞いて、相手の状態を知ることができる。(How are you? I'm fine.など)

- ・身近な動詞や形容詞を理解することができる。(eat, drink, stand, sit, good, nice など)
- ・友達の好きなものを聞き取ることができる。

#### 【話すこと】

- ・英語特有の音やリズム、イントネーションで発音することができる。
- ・基本的なあいさつの表現を英語で言うことができる。
- ・相手に数を尋ねることができる。(How many pencils?)
- ・自分の好きなものを英語で言うことができる。(I like apples.)
- ・友達に好きなものを尋ねることができる。(What do you like? I like baseball.)
- ・相手に何が欲しいか尋ねたり、欲しいものを伝えたりすることができる。(What do you want?)
- ・動物の絵を見て、その動物の名前を英語で言うことができる。(dog, cat など)
- ・あやまったり、お礼を言ったりすることができる。(例：I'm sorry. / Thank you.)
- ・日常生活の身近な話題について、Yes / No で答える質問に応答することができる。
- ・友達の誕生日を聞いたり、自分の誕生日を答えたりすることができる。

高学年（小学校5年生、6年生）

目標：

言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の素地を養う。

育てようとする資質・能力：

#### 【聞くこと】

- ・基本的な英語の音声の特徴をとらえて、正しく聞くことができる。
- ・自然な口調で話されたり読まれたりする簡単な英語を聞いて、情報を聞き取ることができる。
- ・相手のできることを聞き取ることができる。
- ・道案内の英語を聞いて、場所にたどり着くことができる。
- ・相手が行きたい場所について聞きとることができる。
- ・友達の将来の夢について理解することができる。
- ・友達の日について聞き取ることができる。

#### 【話すこと】

- ・基本的な英語の音声の特徴をとらえて、正しく発音することができる。
- ・自分のできることを表現したり、相手のできることを聞いたりすることができる。
- ・相手に道順を聞いたり、道案内をしたりすることができる。
- ・自分が行きたい国を述べたり、相手が行きたい場所について質問したりすることができる。
- ・自分の一日について表現したり、相手の一日を英語で質問したりすることができる。
- ・英語で簡単な物語を話すことができる。
- ・自分の将来の夢について話すことができる。

#### 【書くこと】

- ・アルファベットを活字体(教科書や本などの字体)で書くことができる。(ABC・・・XYZ)
- ・アルファベットの大文字・小文字や符号を適切に使うことができる。(A/a,?!, など)
- ・自分の名前を英語で書くことができる。
- ・日常生活の身近な数字を書くことができる。(1～20まで)
- ・日常生活の身近な英語を書くことができる。(red, dog, desk など)

【読むこと】

- ・文字や符号を識別し、正しく読むことができる。
- ・日常生活の身近な英語を正しく音読することができる。
- ・日常生活の身近な英語を理解することができる。(red, dog, desk など)
- ・日常生活の身近なことを表す簡単な文を理解することができる。(例：I want a pen.)

(6) 研究の経過

年 次	研究推進内容
＜第一年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議 (年4回) (2) 新教科「小学校英語科」の教育課程上の位置付けの検討 (3) 新教科「小学校英語科」の目標設定とカリキュラム作成 (4) 新教科「小学校英語科」評価の在り方の検討と CAN-DO リストの作成 (5) 新教科「小学校英語科」を導入後の中学校英語の目標と指導計画の見直し (6) 児童生徒実態調査 (関心・意欲・態度) の実施 (7) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流・教師間交流の開始 (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」プレ運用開始 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」実施 (10) 「スパイラルタイム」のカリキュラム開発 (11) 文字習得状況調査 (中学1年・5月) の実施 (12) 評価委員会による評価の実施と次年度の方向性の検討 (13) 中学校・高等学校間の効果的な連携の在り方について検討
＜第二年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議 (年4回) (2) 小学校第1学年からの「小学校英語科」の実施 (3) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続/海外との交流活動 (4) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続 (年4回) (5) 1年次研究成果の評価/中学校英語の目標再設定 (6) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」の本格実施 (7) 「どきどき！英語変換チャレンジ」の継続 (8) 「スパイラルタイム」の実践 (9) 文字習得状況調査 (中学1年・5月) の実施 (10) 児童生徒実態調査 (関心・意欲・態度) の実施と研究へのフィードバック (11) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討 (12) カリキュラムの実施・改善
＜第三年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議 (年4回) (2) CAN-DO リストによる評価の一部実施と見直し (3) 小学校に習得する基礎的文法事項の習得状況調査と効果の測定 (4) 中間評価 (成果の確認と修正) (5) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続/海外との交流活動 (6) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続 (年4回) (7) 接続を意識した小学校と中学校のカリキュラムの見直し (8) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」継続 (9) 「どきどき！英語変換チャレンジ」継続 (10) 「スパイラルタイム」の実践継続 (11) 文字習得状況調査 (中学1年・5月) の実施 (12) 児童生徒実態調査 (関心・意欲・態度) の実施と研究へのフィードバック (13) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
＜第四年次＞	(1) 北海道教育大学英語教育プロジェクト会議 (年4回) (2) 附属小学校・中学校間における児童生徒間交流の継続/海外との交流活動 (3) 附属小学校・中学校間における教師間交流の継続 (年4回) (4) 「わくわく！スノーマン・プロジェクト」完成 (5) 研究の成果と効果の検証

(7) 評価に関する取組

年次	評価推進内容
<第一年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校6年生) (3) 学力テストをもちいた英語力の診断 (8月 中学校1年生) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第二年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第三年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証
<第四年次>	(1) 児童生徒の実態調査 (4月、2月 小学校6年生及び中学1年生) (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (2月 小学校5・6年生) (3) GTECをもちいた英語力の診断 (予定) (4) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～) (5) 上記(1)～(4)の評価をもとにした4年間の成果の検証 (11月)

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### 1 児童・生徒への効果

札幌小では、4年生において、昨年度まで2週に1度20分程度の英語活動であったが、週1回45分の授業になったことを喜ぶ声は非常に多いと報告されている。

旭川小からは、言語活動を日常の生活と密接に関連させることにより、児童の英語力が向上するとの報告がある。週一度お弁当の日があることから、翌週のお弁当で食べたい自分だけのリクエストランチを英語で発表する活動を設定し、保護者に協力を依頼し実際に作ってもらうこととした。これにより、必要感をもって取り組んだという。

釧路小では、スノーマン・プロジェクトにつながるピクトフォリオ作成に取り組んだ。自分のイメージと英語を組み合わせることで、慣れ親しみの段階から定着へと深まった。

札幌中では、1年生のオリエンテーション時におけるスパイラルタイムで、外国語活動を想起させる自己紹介活動に取り組ませることにより、生徒が意欲的に活動し、相手の好きな物について驚いたり共感したりしながら、情報のやりとりを行っていたとの報告がある。また、慣れ親しんできた表現を想起させることにより、豊富な語彙と発音に対する意識の高さを引き出すことができたと報告されている。

釧路中では、日々の授業の学習案において、外国語活動との関連を洗い出し、想起させながら中学生らしい知的好奇心を高める活動となるよう工夫しているが、小学校時代よりも英語が好きであると答える生徒が増えたとの報告がある。外国語活動で扱われた表現は音声から導入し、確認として文字による可視化を図ることにより、定着度合いが増えるという。

旭川中からは、CAN-DOリストの利用により、自分がどのような表現を使えるようになったかとふり返り、次の活動への見通しが立つようになったとの報告がある。これにより、テーマを定めてのスピーチ原稿も、15分間で平均83.2語と表現能力が上がっている。

函館小・中では、小中合同授業にチャレンジし、小学生は「普段接することのない仲間にも英語で伝えることができることを実感したり、コミュニケーションを図る楽しさを味わったりしながら、学習へ

の意欲をいっそう高めることができた。」「協同学習の価値に気付き、人とのかかわりを大切にすることができた。」と報告があった。中学生は小学生に負けられないということで学習への意欲的な取組が見られたと報告がある。小学生が思わず日本語を使用すると、中学生がすかさず”In English, please.”と促すなど、中学生らしくリードする姿も見られた。ねらいの設定、小中の教師の綿密な打ち合わせ等苦労は多いが、児童生徒のモチベーションの向上には大いに役立った。

## 2 教師への効果

小学校1年生からの導入を図ることにより、小学校教員全員が英語に関わることとなり、学校全体として英語をどう位置づけ、どう指導していくかという論議が生まれるようになる。また、研究を積極的にすすめることにより、児童がより一層楽しく活動するようになり、その姿によって教師の指導意欲も高まってきた。

中学校においては、教育課程内ではあるものの、年140時間の英語の時数のうち35時間を「スパイラルタイム」と名付けて、小学校英語科との接続を意識したり、英語をツールとして使用しながら、子どもたちが自分のことを表現したり、相手のことを理解することにひたる時間として設定した。これにより、コミュニケーション能力の向上とともに学習意欲が高まってきている。

## 3 保護者等への効果

保護者の期待感は大い。特に、グローバル社会を生きていく子どもたちにとって、情報と英語は大切な資質能力であると認識されているようである。

また、英語を教科として導入するのは、子どものより一層のコミュニケーション能力の育成のためであり、発達段階に応じて子どもの興味・関心を引きだす指導を研究するためであるとの趣旨には納得していただいているところである。

### (2) 実施上の問題点と今後の課題

小学校のカリキュラムについては現在検討段階である。今回8附属が共同して研究にあたりカリキュラム開発を行っているが、それぞれ地域の特殊性もあるために、摺り合わせに時間がかかっているためである。特に、中学校と違い、小学校では担任が授業を行うために校内での調整も時間を要する。さらに、北海道はその広大さ故に、会議を一つ開くことも容易ではない。また、地域性が強く、同じカリキュラムを使用できるわけではないために、整理が必要となる。その分、汎用性のあるカリキュラムを作成できるというメリットもある。

最近小中連携の重要性が叫ばれており、英語という教科は小中連携の切り札となり得る側面がある。しかし、一方、研究を進めていく上で、単純に連携すればよいものではないこともわかってきた。小中それぞれの授業には目標やねらいがあり、そのねらいを摺り合わせていくことが最も大切であり、それには時間がかかることである。

また、評価をどうするかという点も小学校英語科では大切な議論のポイントである。数値ではあらず、よい点を記述することが望ましいことはプロジェクト内でも異論はないが、その評価規準については今後検討していく必要がある。

さらに、小学校英語科が導入されることにより、中学校の指導をどう変化させていくかということが来年度以降の課題である。教育課程が変わらない以上、その指導項目は変わらず、従って評価規準も変わらないとも言えるが、小学校英語科で育ってきた子どもの姿を確かめながら、内容を深化させていく必要がある。生徒の言語運用能力をどこまで高めていくか、来年度以降検討していく予定である



### (3) 外部評価委員からの意見

平成26年2月7日(金) 北海道教育大学附属札幌小学校

外部評価委員：酒井英樹教授(信州大学)、泉大吾指導主事(北海道教育委員会)、  
後藤揚一指導主事(札幌市教育委員会)

教育課程の開発というと、一部の先生のための研究開発だと思われがちで、附属だからできると言われてしまうことが多い。ぜひ、カリキュラムの汎用性を目指し、一般の先生方にも分かるような実践レベルでの研究にしてほしい。

英語を小学校1年生から導入するというのが有効かどうか、結果で示さなければならない時代になっている。この時、なぜ小学校1年生から始めるのかという目的やねらいを示す必要がある。

スパイラルタイムというのは、素地から基礎にあがるときの、繰り返しの学習なのか、それとも発展の学習なのか、はっきりしてほしい。小中連携から小中一貫にと言われる今だからこそ、小・中の先生で集まって英語教育をどうしていくか議論することに価値がある。

ぜひ、9年間での形でカリキュラムを示してほしい。

小学校で英語が教科化された場合、中学校の目標設定が課題になる。小学校段階において中学校の内容の前倒しが必ず発生するからである。スパイラルタイムは、小学校との接続を考えて中学校1年生に設定するとあるが、学年が進んだ2年生、3年生ではどうするかということも考えてほしい。

スパイラルタイムでは教科書の内容から離れて学習することができることが魅力である。例えば、**want to** ~という表現は、教科書でいうと中学校2年生まで待たなければならないが、スパイラルタイムの時間を使えば、中学校1年生でもできる。文法シラバスではなく言語活動レベルで考えられるので、生徒にとって自由性が生まれ、おもしろい活動ができるだろう。この時、英語でどのようなことができるようになっていけばよいのか、見通しがもてるとよい。その見通しこそが**CAN-DO**リストである。

人と人が直接会って行う交流はとても大事。他校交流や校種間連携はぜひ実践を進めてほしい。そこに、ICTを取り入れることで、時間・場所をこえて交流できる。実践例にある「買い物活動」は疑似体験(ロールプレイ)をみんなで行ってみようというものであったが、今後は、議論や話し合い活動など、本当の意味での交流活動も幅広く取り入れてほしい。

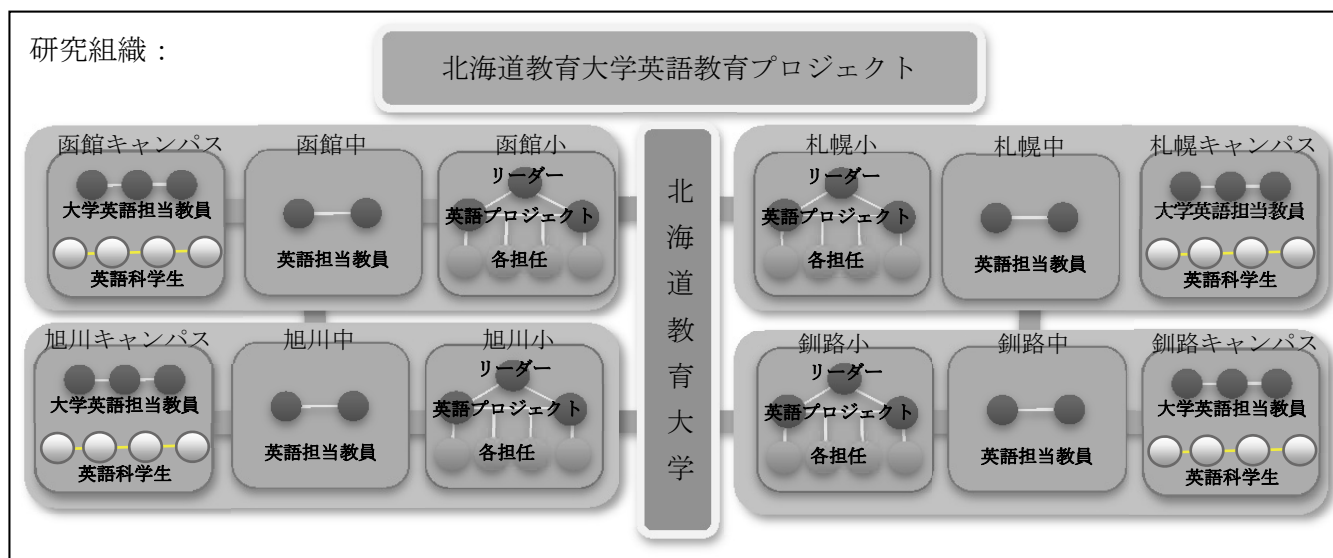
評価についてであるが、エビデンスとして子どもの作品、作文、姿を記録していくとよい。

スノーマン・プロジェクトのピクチャーの概念をもっと広げることで、経験そのものを共有できるだろう。実際の写真やモーショントピクチャー、動画などを取り入れて財産化すると良い。他校の子どもがこういう活動をしているのだ、こういうように英語を使用しているのだというのを見ることで、モチベーションが発生するだろう。

スパイラルタイムの件であるが、小中一貫で考えた場合、小・中の段差を少なくすることがまず大事である。このために、オリエンテーション時に活用するという方向性はよい。段差を低くするために、中学校の先生が小学生(子供が中学生になる前)に授業をしたり、小学生を中学校の教室などに来させて、授業をしたりしているところもある。学年が上がったときには、内容面で学習指導要領を超えるという考え方が良いのではないか。例えば、ディベート、討論となると、高校の範囲である。本物の話し合いができる生徒をぜひ育成してほしい。

## 6 研究組織

### (1) 研究組織の概要



### (2) 研究担当者

北海道教育大学附属札幌小学校	教諭	佐々木 歩
北海道教育大学附属函館小学校	教諭	伊藤 光
北海道教育大学附属旭川小学校	教諭	岸田 直文
北海道教育大学附属旭川小学校	教諭	元島由香利
北海道教育大学附属釧路小学校	教諭	津田 裕匡
北海道教育大学附属札幌中学校	教諭	山口 修司
北海道教育大学附属函館中学校	教諭	宮野 健
北海道教育大学附属旭川中学校	教諭	越野 崇
北海道教育大学附属旭川中学校	教諭	小野 祥康
北海道教育大学附属釧路中学校	教諭	若林 幹浩

### (3) 運営指導委員会

北海道教育大学	副学長	大津 和子 (国際理解教育)
北海道教育大学札幌校	教授	萬谷 隆一 (英語科教育学)
北海道教育大学旭川校	教授	石塚 博規 (英語科教育学)
北海道教育大学旭川校	教授	笠原 究 (英語科教育学)
北海道教育大学釧路校	教授	中村 典生 (英語科教育学)
北海道教育大学函館校	教授	上山 恭男 (英語科教育学)
北海道教育大学附属札幌小学校	副校長	紺野 高裕 (小学校教育)
北海道教育大学附属函館小学校	副校長	檜山 聡 (小学校教育)
北海道教育大学附属札幌中学校	副校長	中村 邦彦 (中学校英語)

## 北海道教育大学附属札幌小学校（外 3 小学校） 教育課程表（平成 26 年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的学習の時間	特別活動	英語科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第 1 学年	300 (-6)		133 (-3)		100 (-2)	66 (-2)	66 (-2)		100 (-2)	34			34	17 (+17)	850 (0)
第 2 学年	309 (-6)		172 (-3)		103 (-2)	68 (-2)	68 (-2)		103 (-2)	35			35	17 (+17)	910 (0)
第 3 学年	235 (-10)	67 (-3)	172 (-3)	87 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	945 (0)
第 4 学年	235 (-10)	87 (-3)	172 (-3)	102 (-3)		56 (-4)	56 (-4)		102 (-3)	35		65 (-5)	35	35 (+35)	980 (0)
第 5 学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
第 6 学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0 (-35)	70	35	35 (+35)	980 (0)
計	1429 (-32)	359 (-6)	999 (-12)	399 (-6)	203 (-4)	346 (-12)	346 (-12)	115	587 (-10)	209	0 (-70)	270 (-10)	209	174 (+174)	5645 (0)

※授業時数、単位数の増減等については、表中に記号を付けたリゴシック体で示すなど、教育課程の基準との対比が明確になるよう記載すること。

・新教科（英語）では、他教科で扱う内容についてその一部を扱うこととし、減時数分の内容を担うこととする。

例えば、国語で担っている話すこと・聞くことのうちのコミュニケーションの基礎、算数における数の基本や図形、時間、音楽における歌唱やリズム遊び、図画工作における造形活動、体育における身体表現、生活科における遊びや学校で働く人たち、理科における動植物の名前、社会科における地域の地名やお店の仕事などの内容である。

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属札幌小学校 校長 戸田 まり

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-10

電話 011-778-0471

FAX 011-778-0640

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
67	2	69	2	74	2	80	2	76	2	73	2	439	12
3		1	1	2		3	1	4		3	1	16	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	1	0	1	11
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	4	0	29						

## 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成20年度～平成22年度 学力の把握に関する研究指定校(図工)

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属函館小学校 校長 根本 直樹

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号

電話 0138-46-2235

FAX 0138-47-7376

### 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
69	2	69	2	76	2	77	2	77	2	76	2	444	12

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	0	5	0	29						

### 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成24年度 教育課程研究指定校 (生活科)

平成25年度 教育課程研究指定校 (生活科・体育科)

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属旭川小学校 校長 岡田 みゆき

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条1丁目1番1号

電話 0166-52-2361

FAX 0166-52-2363

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
65	2	71	2	70	2	71	2	71	2	73	2	421	12

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	3	0	28						

## 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成25年度道徳教育総合推進事業指定校

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属釧路小学校 校長 村山 昌央

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道桜ヶ岡7丁目12番48号

電話 0154-91-6322

FAX 0154-91-6324

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	69	2	64	2	71	2	67	2	70	2	411	12

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	1	4
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	0	3	0	30						

## 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

なし

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属札幌中学校 校長 佐藤 昌彦

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目1-11

電話 011-778-0471

FAX 011-778-0483

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
126	3	126	3	125	3	377	9
7	1	8	1	8	1	23	3

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	18	0	2	0	0	11
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	1	2	0	36						

## 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

平成22年度 人権教育研究指定校

平成23年度 人権教育研究指定校

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし



## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属函館中学校 校長 羽根田 秀実

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道函館市美原3丁目48番6号  
 電話 0138-46-2233  
 FAX 0138-47-6769

### 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
119	3	119	3	118	3	356	9

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	3	0	29						

### 5 研究歴

#### (1) 文部科学省関係

平成21～22年度 教育課程研究指定校

(社会科, 理科, 音楽, 美術, 保健体育, 外国語)

平成23～24年度 学習評価に関する研究指定校

平成25年度 教育課程研究指定校(国語)

#### (2) 北海道関係

なし

#### (3) その他

なし

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属旭川中学校 校長 浅川 哲弥

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道旭川市春光4条2丁目1番1号

電話 0166-53-2751

FAX 0166-53-2861

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
124	3	118	3	121	3	363	9

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	7
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	4	0	31						

## 5 研究歴

## (1) 文部科学省関係

なし

## (2) 北海道関係

なし

## (3) その他

なし

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

北海道教育大学附属釧路中学校 校長 杉山 佳彦

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 北海道釧路市桜ヶ岡7丁目12番2号

電話 0154-91-6857

FAX 0154-91-6812

## 3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数、学級数

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
101	3	108	3	110	3	319	9

(下段は特別支援学級、2学年で1学級)

## 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	14	0	1	0	0	3
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
0	0	3	0	26						

## 5 研究歴

(1) 文部科学省関係

なし

(2) 北海道関係

なし

(3) その他

なし

平成25年度

研究開発実施報告書

資料

北海道教育大学附属札幌小学校  
外7校

北海道教育大学の方針：

国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力を育てる

<p><b>児童の実態</b> ○相手との関係を考え、英語を使ってコミュニケーションしようとする意欲が見られる。 △正しい表現や発音を身につけたいという意識にやや欠ける。</p>	<p><b>目指す児童生徒の姿</b> ・英語に慣れ親しみ、相手との関係性を深めるために主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童 ・4技能を統合的に活用しながら課題を解決しようとしていく生徒</p>	<p><b>生徒の実態</b> ○英語を相手との関係性を高めるために学びたいという意欲のある生徒が多い。 △書くことや語彙を増やすための家庭学習を厭う生徒がいる。</p>
---	---	---

研究主題：

4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法、評価方法、中学校との円滑な接続の在り方  
～わくわく！スノーマン・プロジェクトを中心として～

研究仮説：

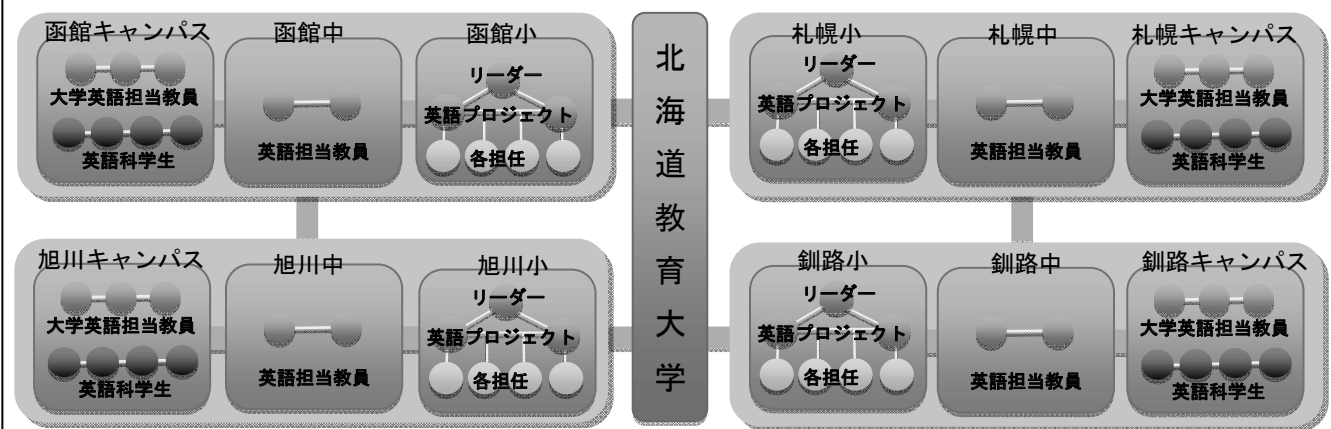
国際社会において主体的に活躍するために求められるコミュニケーション能力は、小学校において新教科「小学校英語」を導入するとともに、中学校において新領域「スパイラルタイム」を新設し、小・中学校との効果的な連携の中で、ICT 機器等を活用しながら4技能を総合的に育成し、他者との協働学習によって育成される。

研究内容：

- 新教科「小学校英語」、新領域「スパイラルタイム」を導入し、カリキュラム開発を行う
  - 小学校新教科「小学校英語」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - 中学校新領域「スパイラルタイム」における目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - 小学校卒業時の Can-do list の作成
- 「スノーマン・プロジェクト」を意識した授業づくり
  - 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり
  - 自らの学びを確認し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発展教材（スノーマン）づくり
  - 時間や空間を超えて相手とつながること楽しさを実感することによる主体的態度の育成
- 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」
  - 空間を超えて人とつながる環境（スカイプ、E-mail、インターネット）
  - 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境（インターネット）
  - 音と文字の関連を一人でも実感できる環境（どきどき！英語変換チャレンジ）
- 効果的な小中連携の在り方
  - 効果的な小中の情報交換の在り方
  - 教師間交流、児童生徒間交流の在り方
  - 効果的な小中接続のためのカリキュラムの在り方

研究組織：

北海道教育大学英語教育プロジェクト



北海道教育大学附属学校  
「研究開発校」英語プロジェクト

「小学校英語の導入と  
中学校との接続に関する研究」



平成25年5月7日 札幌駅前サテライト

研究の背景

小学校外国語活動導入による望ましい変化

- ・聞く力が高まった ・英語の発音がよくなった
  - ・語彙が増えている ・アクティビティに積極的である
- 小学校外国語活動導入によるマイナスイ面
- ・中学校入学時にすでに、英語力の差がついている
  - ・英語嫌いが増えている

その理由として

- ・児童の知的好奇心を満足させていないのでは？  
(学びたい、学んだことを確かめたい、文字に触れたい)
- ・中学校で素地を生かしていないのでは？  
(別物と思っている、小中で学びが透切れている)

→理由を分析し、その対策を考えたい

研究仮説

国際社会において主体的に活躍するため  
に求められるコミュニケーション能力は  
小学校において新教科「小学校英語」を  
導入するとともに、中学校の英語の時間  
の一部に「スパイラルタイム」を設定し  
小・中学校との効果的な連携を図る中で  
ICT機器の活用と他者との協働学習を効果  
的に導入しながら、4技能を総合的に育  
成することで向上する。

北海道教育大学附属学校  
「研究開発校」英語プロジェクト

研究開発課題

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニ  
ケーション能力を育成するため、小学校に新教科を  
導入し、4技能を総合的に育成するカリキュラムや指  
導方法及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り  
方についての研究開発

研究主題

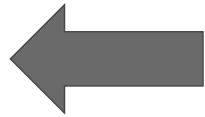
4技能を総合的に育成するカリキュラムや指導方法  
及び評価方法、中学校との円滑な接続の在り方  
～わくわく！スノーマン・プロジェクトを中心として～

知的好奇心を満足させるために 英語嫌いを増やさないために



教科「小学校英語」の新版  
スパイラルタイムの設置

①「小学校英語」を新設し、小学校第1学年から英語を導入  
することで、言語や文化についての体験的な理解と積極  
的なコミュニケーションを図ろうとする態度を重視しながら、  
「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を総合的に育むこと  
により、国際社会において主体的に活躍するために求められ  
るコミュニケーション能力を育成することができる。



小学校高学年週1時間程度  
英語を使ってコミュニケーション  
学んだことを「聞く」「書く」  
小学校中学年週1時間程度  
英語を「聞く」「話す」

小学校低学年週2時間程度  
英語の音を耳にする、口にする

研究の概要

小学校

教科「小学校英語」の導入

「小学校英語」の情態面  
及び技能面での目標と  
評価の在り方

小中の教師間交流  
カリキュラム連携

4技能を総合的に育成する  
系統的なカリキュラムや  
文法指導の在り方

中学校

スパイラルタイムの導入

「小学校英語」との継  
続的な指導の時間の  
在り方

児童生徒間交流  
大学生との交流

学びのイノベーション

国際社会において主体的に活躍できる英語のコミュニ  
ケーション能力と積極的な態度の育成を図る

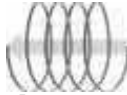
研究の目的

- ・知的好奇心に応えるカリキュラムを開発する
- ・段階的・系統的に学習できるようにするためのカリキュラムや  
指導方法を開発し、児童の発達段階に応じた知的好奇心を満  
足させる
- ・中学校英語授業の改善を図る
- ・小学校で培われたコミュニケーション力の素地を生かす中学  
校授業の在り方を検討する
- ・小学校と中学校の連携の在り方を探る
- ・児童生徒の言語習得への動機付けを図るための様々な交流  
活動の在り方を検討する
- ・ICTの効果的な活用方法を開発する
- ・児童生徒のコミュニケーション力を高めるためのICTの効果  
的な活用方法を開発する

②小学校で培った英語によるコミュニケーション能力が中  
学校でも引き継がれるよう、中学校において、英語の授業  
の一部に「スパイラルタイム」を設定し、指導方法や学習内  
容の一貫性や共通性を目指したカリキュラムを作成し、教  
師間交流、児童生徒間交流を中心とした効果的な連携を図  
ることで、生徒の英語学習へのモチベーションや目的意識  
が高まり、コミュニケーション能力が向上する。

中学校英語教科的学習、テキスト中心、文法シラバス、正確性

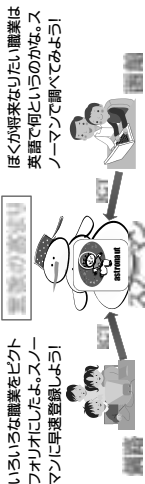
通称の授業(週3時間)  
テキスト中心、文法重視の学習  
より高度な自己学習へ



スパイラルタイム(週1時間)  
「聞く」「話す」活動中心  
学びを想起する

小学校英語:課題解決的学習、活動中心、場面シラバス、積極性

③国際社会において主体的に活躍するために求められる、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図る態度は、「学びのイノベーション」としてICT機器を積極的に活用し、遠方に住む子どもや異文化の子どもたちとの協働学習を通じて育まれる。また、学習成果を蓄積型発達教材としてデータベース化する「わくわくスノーマン・プロジェクト」は、子どもの文字への関心を引き出すとともに、「読むこと」「書くこと」に取り組む意欲につながり、他者との協働学習による学びの広がりを実感させ、英語学習の動機付けと異文化理解を促す契機となり、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながる。

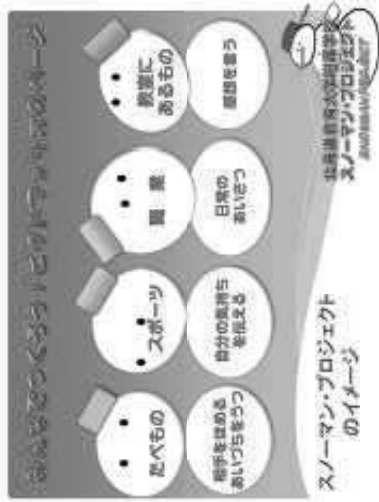


### 研究内容

1. 新教科「小学校英語」を導入し、カリキュラム開発を行う
  - (1) 目標と評価、カリキュラムの在り方についての研究
  - (2) 中学校「スノーマンタイム」における指導方法と指導内容の在り方
  - (3) 小学校卒業時のCan-do listの作成
2. 「スノーマン・プロジェクト」を基盤とした授業づくり
  - (1) 課題解決的な手法により「読むこと」「書くこと」を育成するピクトフォリオづくり
  - (2) 自らの学びを整理し、他者との協働によって学びの広がりを実感できる蓄積型発達教材(スノーマン)づくり
  - (3) 時間や空間を超えて相手とつながることの楽しさを実感することによる主体的な学習の育成
3. 英語教育を効果的にすすめる「学びのイノベーション」
  - (1) 空間を超えて人とつながる領域(スカイプ、E-mail、インスタグラム、インターネット)
  - (2) 時間を超えて仲間や先輩の学習成果から学ぶ環境(インスターネット)
  - (3) 居て文字の関連を実感できる機会(ときどき!英語交換チャレンジ)
4. 効果的な小中連携の在り方
  - (1) 効果的な小中連携の在り方
  - (2) 教師間交流、児童生徒間交流の在り方
  - (3) 効果的な小中連携のためのカリキュラムの在り方

### 他教科との関連を考えた指導内容・活動の例:

- 1年…生活科 どうぶつをかおひ  
dog, cat, rabbit, mouseなど身近な動物のことを英語で書いてみる。調べてみる。英語での鳴き声を聞いて、どの動物の鳴き声か当ててみる。
- 2年…図画工作 コレクションをさがそう  
レッド、ブルー、ブラック、イエロー、ピンクの5戦隊の絵を見せ、英語らしく言ってみる  
色と英語名のイメージを一致させて、自分でも書かせてみる。
- 3年…社会 店ではたらく人  
「お店で売られている商品」の中で、英語名の品物に自然に触れさせ、cabbage, pen, ice-creamなどの英語に触れる。  
アメリカのスーパーマーケットの写真を見せながら、日本の品揃えや表記、品物名を比べる



### 教育課程の特例

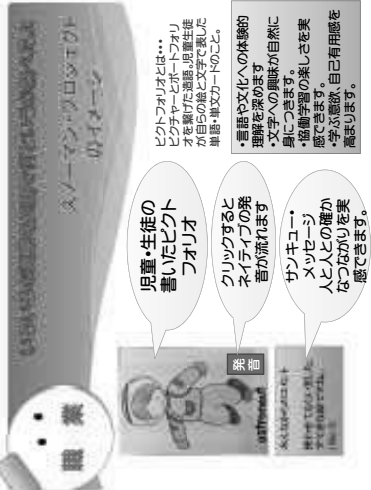
小学校新教科「小学校英語」の新設  
第1学年及び第2学年を週0.5時間、年17時間設定する。  
各教科から時数をあてる。  
第3学年から第6学年は週1時間、年間35時間設定する。  
第3学年及び第4学年は各教科、総合的な学習の時間から時数をあてる。  
第5学年及び第6学年は外国語活動の時数をあてる。

### 指導内容について

- 1・2年…他教科との関連を図る  
教科の中で身の回りの英語に触れる活動(色、数字、スポーツなど)
- 3・4年…Hi, Friends 1を中心に  
他教科との関連内容・時期を検討しながら  
※3年生でのローマ字の指導に合わせてアルファベットを導入し、以降自然な形で英語を目に触れさせていく
- 5年 …Hi, Friends 2中心
- 6年 …Hi, Friends 全体のスノーマン教材作成  
→同じ言語材料を扱いつつ、別の活動  
文字の導入…「読むこと」「書くこと」  
文法指導…書くことのルール(大文字と小文字、単語の書き方)、名詞の複数形等

### 研究計画

- ①小学校に教科「小学校英語」を新設し、その目標設定の在り方について研究する
- ②教科「小学校英語」における評価の在り方を研究する
- ③児童の発達段階に応じて4技能を総合的に育成する系統的なカリキュラムを開発する
- ④コミュニケーションを支える文法指導の在り方を研究する
- ⑤小学校と中学校の円滑な接続のための教師間交流、児童生徒間交流の在り方について研究する
- ⑥中学校英語の時間の一部に「スノーマンタイム」を設定し、その指導内容や指導計画について研究する
- ⑦高等学校の英語教育との接続を意識した中学校英語の在り方の研究をする
- ⑧英語学習における「学びのイノベーション」を活用する
- ⑨「わくわくスノーマン・プロジェクト」を立ち上げ、その効果を分析する



年次研究計画(第1年次)

- (1) 研究開発学校プロジェクト会議(年4回)
- (2) 新教科「小学校英語」の教育課程上の位置付けの検討
- (3) 目標設定とカリキュラム作成
- (4) 評価の在り方の検討と Can-do listの作成
- (5) 小学英语導入後の中学校の目標と指導計画の見直し
- (6) 児童生徒実態調査(関心・意欲・態度)の実施
- (7) 小・中間における児童生徒間交流・教師間交流の見直し
- (8) 「わくわく!スノーマン・プロジェクト」の運用開始
- (9) 「どきどき!英語変換チャレンジ」の実施
- (10) 「スパイラルタイム」のカリキュラム開発
- (11) 文字習得状況調査(中学1年・5月)の実施
- (12) 評価委員会による評価と次年度の方向性の検討
- (13) 中・高間の効果的な連携の在り方についての検討

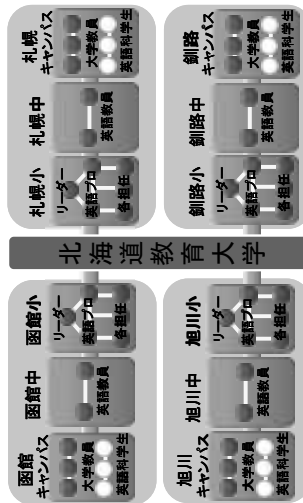
年次評価計画(第1年次)

- (1) 児童生徒のアンケート調査 (5月、2月 小学校6年生及び中学1年生)
- (2) 児童英検をもちいた英語の理解力診断 (5月、2月 小学校6年生及び中学1年生)
- (3) 文字に関する調査 (5月、2月 小学校6年生及び中学1年生)
- (4) 学力テストをもちいた英語力の診断 (8月 中学校1年生)
- (5) 振り返りカードによる情意面の見取り(6月～)
- (6) 上記(1)～(4)の評価をもとにしたカリキュラムの検証

初年度取り組み内容

- (1) 「小学校英語」で育むべき力についての検討
- (2) 「小学校英語」の教育課程上の位置付けの明確化
- (3) 「小学校英語」の目標の設定及びカリキュラム作成
- (4) 評価方法や評価指標の検討
- (5) 中学校英語の目標や指導計画の見直しの検討
- (6) 検証のための導入前の客観的データ取り
- (7) 教師間交流の実施
- (8) 「わくわく!スノーマン・プロジェクト」の運用開始
- (9) 「どきどき!英語変換チャレンジ」の実施
- (10) 「スパイラルタイム」におけるカリキュラム開発
- (11) 文字習得状況の調査
- (12) 評価委員会を立ち上げ
- (13) 中・高における効果的な連携についての検討

北海道教育大学英語教育プロジェクト





# わくわく！スノーマン・プロジェクト

課題解決的な活動によって生まれた学習成果を実感したり、共有したり、広げること  
で、4技能の総合的な育成を目指すプロジェクトです。



## スノーマン・プロジェクトとは？

スノーマン=雪だるま

=子どもたちの学習成果のデータベース

北海道に住む子どもたちが、将来勇気をもって、自信をもって、世界に羽ばたいてほしい！そんな願いを込めて名付けました。「学ぶことは楽しい！」という実感をもつには、自分の学習成果を多くの人に見てもらい、評価してもらうことが一番です。始めは小さな雪玉づくりから始まる雪だるま作りも、雪玉を転がしたり、他の雪玉をくっつけたりで大きくしていくように、自分の学習成果を少しずつ増やしていくことで学びを大きくしてほしいと願っています。

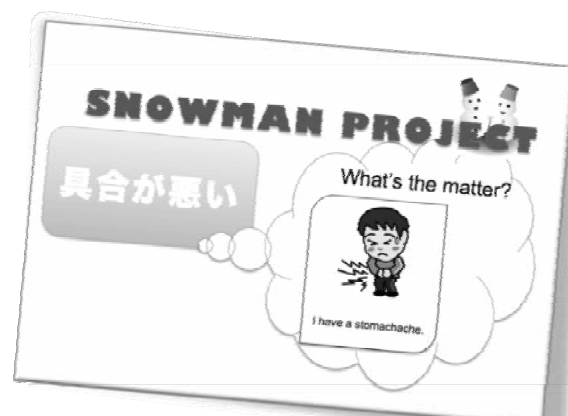
でも、それ以上に、スノーマンは、仲間との協働で飛躍的に大きくなります。「仲間と一緒に学習することで新しい世界が見えてくる！」ということを実感してもらいたいというのが2つめの願いです。この仲間は近くの子もだけではありません。英語をコミュニケーションツールとして使用し、ICTを活用することで、時間や空間を超えて遠くに住む仲間とつながることを体感し、世界を身近に感じ、世界に羽ばたく素地を養ってほしいと願っています。

## ピクトフォリオ作りとは？

スノーマン・プロジェクトで目指すのは、ピクトフォリオ作りです。ピクトフォリオとは、英語学習の初期の段階の子どもでも理解できるように、絵と英単語や簡単な表現で構成される辞書を指します。例えば、「画鋏」であれば、画鋏の絵と thumbtack の単語を組み合わせたカードを作ります。これをインターネット上にあるデータベース「スノーマン」にアップするのです。デジタルですから音声を入れることも可能です。子どもたちが自分で作成したカードが、データベース「スノーマン」に学習遺産として蓄積されていきます。英語を書いたり読んだりする力を、楽しみながら無理なく育てていきます。



自分で調べた学習内容をウェブ上に、アップします。いつでも、どこからでも、誰にでも閲覧可能です。音声を入れることも可能です。表現活動に生かしたり、教員が生きた教材として利用することも可能です。



スノーマン・プロジェクトは、常に更新され、まだ誰も調べていない語彙や表現、カテゴリを増やすことが可能です。「これは英語で何というのだろう」という知的好奇心も育みます。



## ① シラバスの編成方針

場面 (situation) と 題材 (topic) (子供が実際に話すであろう話題) を重視する。

\* 文法事項はできるだけ易から難へと整理し、子供の負担を軽減するために、表現の中に複数の文法事項を入れることは避けた。

## ② 伝える・分かるコミュニケーションの技術

多様な方法で伝える技術や対話を円滑にするコミュニケーション・ストラテジーを段階的に指導する。具体的には、非言語的手段や、既習の単語や文を使った言い換え (paraphrase)、確認・あいづち等の応答表現などを指導する。

\* paraphrase を学ぶために段階的な練習方法

低学年 教師からの three hint quiz (ヒントを聞いて理解する。ヒントとなる名詞・形容詞指導)

中学年 子供による three hint quiz の作成 (ジェスチャーや単語など既習事項を活用しヒントを工夫する。ヒントとなるフレーズ、名詞・形容詞等の指導)

高学年 日本的な事柄に関して言い換えして伝える具体的な実践

(ヒントとなるフレーズ、名詞・形容詞等の指導)

It's from ~などヒントに使える文型も使うが、単語だけでもよい。中学校の継続課題としてもよい。

\* 学年のレベル、表現に応じてあいづち等の表現を盛り込み、会話を進展させる方法を学ぶ

## ③ 覚えるだけの英語学習の先に、創造性を加味する

児童が工夫する要素、創造する要素を加味する。とりわけ高学年においては、「覚える」だけの英語学習に飽きたらなくなってくる可能性があり、自分たちの発想で解決する、アイデアを出すなど、創造性を英語学習に取り入れる。

## ④ 表現のリサイクル

限られた時間の中での表現の定着を確保するため、単語の再利用 (リサイクル) をできるだけ実現する。たとえば、低学年の段階から、形容詞等を用いて複数の単語を組み合わせたり、既習の表現をとりいれたりする指導案となるようにし、さらに言い換え (paraphrase) による再利用を試みる

## ⑤ 場面・状況に応じて表現を使うことを重視

高学年で、CS スキット (会話表現から使用場面を創作してスキット演示) とアフレコ・スキット (絵などにセリフを考える) を入れることで、状況に応じた場面での、発話の大切さを強調し、またそれまでの表現の復習となるようにする。

## ⑥ 中学につながる原初的な言葉の気づき

高学年では、音、語、文などのしぐみに気づかせる要素を入れる。あくまで表現の運用に慣れた後に、帰納的に共通性や違い、しぐみについて、無理のない範囲で意識づける。表現のかたまり (チャンク)

として場面や意味を関連づけて覚えた表現が、実は複数の語から成っていることや、入れ替えができる枠があるなどへの気づきを引き出すことができるとよい。

\*子供になじみのある話題・場面であれば、文法的に複雑とされる表現（過去形や現在完了形等）も、詳しく説明するのではなく、かたまり（チャンク）としてとらえ指導する。

## ⑦ 各学年のねらい

- 1～2年 外国語の音声や日常的な表現に慣れ親しませる。  
はっきり、ゆっくり話してもらえば、身近な生活に関する語彙を聞きとれ、まねして発音することができる。  
簡単な問いに関して、単語で応えることができる。  
自分の名前、年齢などを伝えることができる。  
教師からの **three hint quiz** により、**paraphrase** の基礎を養う  
大文字と小文字の区別がつき、アルファベット読みができる
- 3～4年 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。  
相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えたりしてくれるなら、単語、あるいは簡単な文を使って、コミュニケーションができる素地を養う。  
他人のことについて伝えることができる。  
子供による **three hint quiz** の作成を通して **paraphrase** の技術を進展させる。  
音素読みの基礎ができ、音素読みが当てはまる簡単な語句を読むことができる
- 5～6年 1～4年で学習したことを基本に、コミュニケーション能力のさらなる進展を図る。  
簡単な話題に関して、自分の意見を述べるができる  
意見を述べる際の英語的発想を学ぶ  
自分のことをさらに詳細に伝えることができる  
**paraphrase** の具体的な実践を行い、伝えたい気持ちを具現する。  
音素読みの例外となる語句をある程度読め、簡単な絵本を大方読むことができる
- 全学年を通して、国際理解に関する知識を学び、態度を養う

## 文字指導

- ① 6年間を通して、授業中の数分間を文字指導にあてる。
- ② 1年生は **ABC** の文字を見ながらアルファベット読みで歌を歌ったりゲームをしながら、発音の基礎を養い、文字と音の一致を図る。大文字指導に帯時間5回分、残りは小文字に充てる
- ③ 2年生は小文字を重点的に行う。指導方法は1年に準ずる。
- ④ 3, 4年は帯時間で音素読みを練習する。さらに年間数時間程度、文字指導を行う。内容は既習の単語や文を基本に、音素読みに関する学習をゲーム中心に行い、子供が楽しんで学べるようにする。
- ⑤ 5, 6年は音素読みの例外を帯時間で学習する。さらに年間数時間ずつ、既習の単語や文を読んだり、絵本を読むことに挑戦する。

1年次のカリキュラム \*目標 ○言語目標 ◎コミュニケーション的目標 ☆知識、理解

	4月	5月	6月	7月	9月
単元名	Lesson 1 英語であいさつしよう	Lesson2 虹の色は何色？	Lesson3 動いちゃだめだよ	Lesson4 虫取りをしよう	Lesson5 いくつあるかな？
時間	2	1	2	1	1
目標	○英語で挨拶をする ◎友達の名前を覚え挨拶の後につけて言う ◎友達に笑顔、大きな声で挨拶をする ☆英語での挨拶を知る	○色の名前を聞いたり、言ったりする ◎虹の色の名前を言う *CLIL的な活動	○簡単な動作の英語を聞いたり、言ったりする ◎動作の指示を聞いてその通りの動作をしたり、止めたりする	○虫の名前を聞いたり言ったりする ◎虫の名前を言われて理解する	○1～10まで数字を聞いたり、言ったりする ◎教師の質問に数字で答える
活動	歌、 お互いに挨拶をする。 じゃんけんゲーム	歌、 虹の色塗り	歌、 フリーズゲーム	歌、 虫取りゲーム	歌、 quiz
教師	<i>How're you doing? (How's it going? How are you?)</i>	<i>This is a rainbow What color? How many colors? Color this ~.</i>	<i>Stand up. Sit down.</i>	<i>Let's catch insects. flowers, honey leaves,,</i>	<i>How many?</i>
子供の言語材料	Hi, Hi, rock ,scissors , paper Hi, Ryu Hi, Ms. White Good , thank you	red, yellow, green purple, orange pink, blue	jump , swim, walk, run turn, fly kick	butterfly, bee beetle, ladybug, snail ant	one ~ ten
選択	How are you? How's it going? I'm OK	black, white, brown	hop dance	dragonfly caterpillar grasshopper spider	
復習					虫

1年次のカリキュラム \*目標 ○言語目標 ◎コミュニケーション的目標 ☆知識、理解

10月	11月	12月	1月	2月	3月
Lesson6 顔と体	Lesson7 この野菜と果物わかるかな？	Lesson8 クリスマス	Lesson 9 動物園へ行こう (ジャングルへ行こう)	Lesson 10 どんな乗り物が好きですか (どんな乗り物で行きますか?)	Lesson 11 進め！止まれ！
1	3	1	2	2	1
○体の各部の名前を聞いたり、言ったりする ◎体の一部を触れと言われて触ることができる	○野菜の名前を聞いたり、言ったりする。 ◎色や形のヒントで野菜の名前を言う	○クリスマス関連の語彙を聞いたり、言ったりする。 ☆クリスマス関連の語彙を知る *図工と関連させる	○動物園にいる動物の名前を聞いたり、言ったりする ◎クイズに答える ☆地域の動物園について知る	○乗り物の名前を聞いたり、言ったりする ◎どの乗り物が好きかと聞かれて答える ◎目的地への乗り物の手段を聞かれて答える	○英語を聞いて理解する。 ◎英語を聞いて理解し、その通りの動作をする
歌 タッチングゲーム	歌、 quiz	歌、 図工	歌、 quiz	歌、 好きな乗り物調査	歌、 サークル in, out ゲーム
<i>Touch your~.</i>	<i>long, small, round, big, hard, soft, sweet, sour, bitter, Guess what? fruit, vegetable,</i>		<i>Let's go to the zoo! animal</i>	<i>Who likes this one? fast, slow How do you go there?</i>	<i>Go, stop Fast, slow</i>
head shoulders knees, toes, eyes, ears, nose, mouth,	carrot, peas, tomato potato, pumpkin onion, lettuce, cucumber apple, peach, banana, cherry, orange, strawberry,	candle stockings ribbon, bell star Santa Claus candy cane	lion, tiger panda, monkey polar bear, penguin lesser panda, hippo, zebra, elephant, giraffe, gorilla,	By bus bus. train plane car ship truck bike, rocket	up, down in out
eyebrows, ,legs, ,arms,, hair neck, foot(feet)	mushroom, grapes, watermelon, lettuce pineapple, cucumber green pepper		koala, deer kangaroo	helicopter boat subway UFO	
one ~ ten,	体、色、数、	色	顔、体、色		動詞

2年次のカリキュラム \*目標 ○言語目標 ◎コミュニケーション的目標 ☆知識、理解

	4月	5月	6月	7月
単元名	Lesson 1 ジェスチャー大会	Lesson 2 これってどんな形？	Lesson 3 水の中の生き物を観察しよう（すし屋で注文しよう）	Lesson 4 家族を集めよう？
時間	2	2	2	2
目標	○英語の意味を理解し、動作で表現する ◎教師が言ったとおりに動作する	○形の名前を聞いたり、言ったりする ◎英語の形の名前を聞いてその形に似たものを日本語で言う ◎今まで学習したものの形を言う	○魚の名前を聞いたり、言ったりする ◎すし屋で魚の名前を言って注文する ☆魚の名前の言い方を知る	○家族の名前を聞いたり、言ったりする ◎お互いの言うことを理解する ☆家族の言い方を知る
活動	歌、チャンツ ジェスチャーゲーム	歌、quiz 図画	歌、quiz	歌 ジェスチャーゲーム
教師	<i>Copy me.</i>	<i>Can you find something oval? What's this shape?</i>	<i>Look at that fish. It's a ~. That's a ~. small, long, big, hard, soft, heavy, sea, river</i>	
児童の言語材料	eat, drink sleep, wash, push pull	circle oval square triangle rectangle	fish whale octopus squid shrimp crab tuna salmon salmon roe, egg	dad mom brother sister grandma grandpa
選択	cry, laugh, bow, throw, knock,	star, heart		baby
復習	jump, swim, walk, run, turn, fly, kick	色	形容詞、色、形	

9月	10. 11月	1月	2月	3月
Lesson 5 ハロウィーンのお面を作ろう	Lesson 6 好きなおやつをもらおう	Lesson 7 20まで教えてみよう	Lesson 8 見て！きれいだね	Lesson 9 自分のことを伝えよう
1	2	2	2	2
○ハロウィーン関連の語を知る ☆ハロウィーンについて知る *図工と関連させる	○自分の好きなおやつを下さいと言える ○相手がほしいといったおやつを渡す ◎好きなおやつを下さいと言い、受け取ってありがとうと言う ◎相手の好きなおやつをどうぞと言って渡す	○20まで言う ◎友達と、計算問題を出したり、答えたりする ☆算数の計算式を英語で知る CLIL的な活動	○ある物の感想を表現するために形容詞を使う ◎ある物の感想を言いあったり、あいづちをうつ ☆大きさ、長さ、感想等の英語を感覚で理解する	○名前、年齢、好きなものを言う。 ◎友達の前で名前、年齢、好きなものを伝える ◎友達のスピーチを聞いて理解する ☆簡単なスピーチの方法を学ぶ
歌、 Boo Who の絵本	歌、チャンツ Yummy and Yucky の絵本	歌、チャンツ 足し算、引き算	歌、 Big and Little の絵本	歌、 自己紹介 アルファベット
<i>Make a happy face.</i>	hot, cold, sweet, bitter			<i>What's your name?</i> <i>How old are you?</i> <i>What do you like?</i>
monster , jack o' lantern ghost, witch, happy face sad funny scary	ice cream, pie chocolate , cookies pancake , cake sandwich, pudding water, milk, juice yummy, yucky B, please. Here you are. Thank you.	11 ~ 20 plus minus	Look! Look! Beautiful! Yeah! big, little long short cute cool	Hi, I'm ~ . I'm 7. I like ~. Thank you.
Trick or treat Vampire, mummy	pizza, cereals ,snacks, jelly	Times		
		数字	形容詞	数字 その他



平成25年度

研究開発実施報告書

英語力調査結果

北海道教育大学附属札幌小学校  
外7校

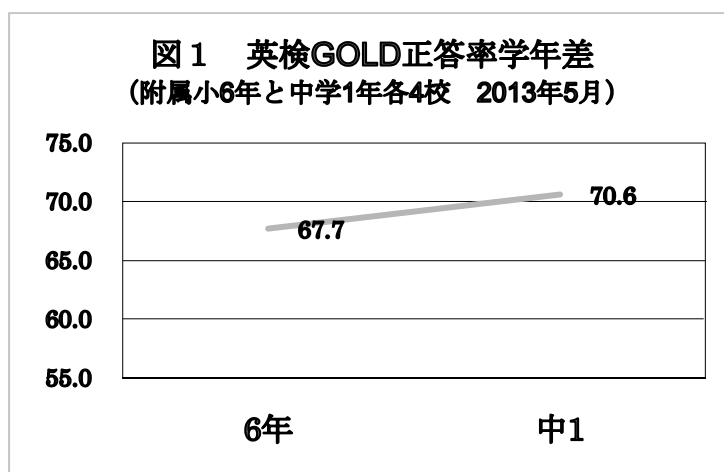
## 研究開発学校にかかわる英語力調査等について

### 1. 児童英検による英語力調査の結果

研究開発学校の受託に当たって、ベースラインとなる初年度の英語力調査・動機づけ調査を行った。調査においては、児童英語検定 GOLD および独自の語彙テスト、情意アンケート等を実施し、分野別の実態を探った。ここではデータ分析作業の進捗状況から、全般的な英語力調査と語彙テストの結果の概要について述べる。

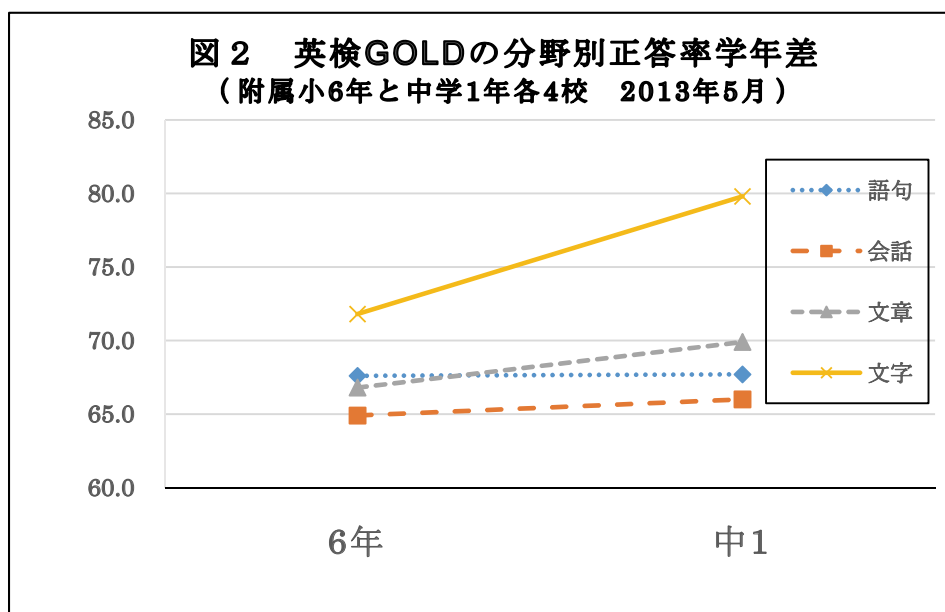
まず児童英検 GOLD の結果から報告する。児童英検 GOLD は、1) 語句(絵に合う文を聞いて選ぶ) 2) 語句(単語を聞き、異種の単語を選ぶ)、3) 会話(会話を聞いて、適切な返答を選ぶ)、4) 文章(お話を聞き、絵を選ぶ)、5) 文字(文字に合う単語の絵を選ぶ)、6) 文章(絵を見て質問を聞き答えを選ぶ)、7) 会話(お話を聞き、答えを選ぶ)、8) 文章(絵の状況を見て言うべき表現を聞いて選ぶ)、9) 文字(4コマ漫画を見て文を読み選ぶ) という構成となっている。2013年5月に、札幌・旭川・釧路・函館の4地区の附属小学校計4校(6年生282名)、および同4地区の附属中学校1年生(470名)を対象として調査を行った。附属中学校の入学時点で外部進学生が入るため中学生の人数が増えている。なおテストは小学5年生にも実施しているが、札幌と旭川小学校のみで実施したため、本報告からは除外している。

まず、4校合計した形での学年の差をみってみる。全体正答率は、6年の時点で67.7点(SD15.6)、中学校1年の時点で70.6点(SD15.8)であり、有意差( $t=2.4561$ ,  $p<0.05$ )が見られた(図1)。小学校6年生から中学校1年生にかけて、全体的に英語力は伸びていると推測される。ただし、2つの集団は別集団であるため、同一集団が2時点間で成長した伸びのみを表しているわけではないため、慎重な解釈が必要である。



次に、語句、会話、文章、文字の分野別に見てみると、小学6年生と中学1年生の間の

差にばらつきがあることが分かる（表 1、図 2）。特に差が大きかったのは、文字である。問題別に見てみると、設問 5 の単語を読んで、適切な語を選ぶ問題が 11.9 ポイントの差があり、最も差が大きかった。中学 1 年生は、単語を読んで、適切な単語の絵を選ぶことにおいて長けていたことが分かる。



**表 1 英検 Gold の分野別正答率の差**

(附属小 6 年と中学 1 年各 4 校 2013 年 5 月)

	語句	会話	文章	文字
6 年	67.6	64.9	66.8	71.8
中 1	67.7	66.0	69.9	79.8

文字で書かれた単語の意味をとることにおいて最も大きな差が観察された理由は、小学校外国語活動が音声中心であり、文字の学習がさほど多くなく、本格的な文字学習が中学校になってから行われるためであろうと推測される。この結果から、現状では、中学 1 年生が単語の文字能力において大きく伸張していることが推察される。ただし、調査時期が 5 月であるため、今回の調査では、中学校 1 年生は、中学校入学後 1 ヶ月しか経過していないため、純粋に中学校での文字学習の成果だけによって、文字能力が伸張したかどうか断言はできない。

今後は、小学校・中学校における指導カリキュラム・指導方法等の取り組みによる英語力・動機づけへの影響の違いや経年変化を検証すること、また検証方法を検討することが必要である。

## 2. 語彙力調査結果について

2013年5月に、附属小中学校の児童生徒880名（小学5年生146名、小学6年生275名、中学1年生459名）を対象に、語彙に関するテストを実施した。語彙テストの形式、及び出題した単語は以下の通りである(表2)。

表2 語彙テストの形式と出題した語

	形式	出題した単語
問1	英語の音声を聞いてそれに合う絵を4つの中から選ぶ（音声から意味への対応）	teacher, run, animal, triangle, ruler, calligraphy
問2	英語の音声を聞いて、その意味を日本語で書く（音声から意味への対応）	hospital, go, yellow, home economics, pudding, purple
問3	示された絵の音声として正しいものを4つの英語の音声から選ぶ（意味から音声への対応）	June, eat, rice, glove, circle, bat
問4	英語のスペリングを見て、それに合う絵を選ぶ（文字から意味への対応）	right, play, bird, parfait, starfish, eggplant
問5	英語のスペリングを見て、その意味を日本語で書く（文字から意味への対応）	Japan, see, breakfast, sausage, rabbit, microscope

結果は以下の図3の通りである。なお、被験者数の異なる学年間の比較を容易にするために、結果は正解率で示している（中学校1年生は7年生として表示）。

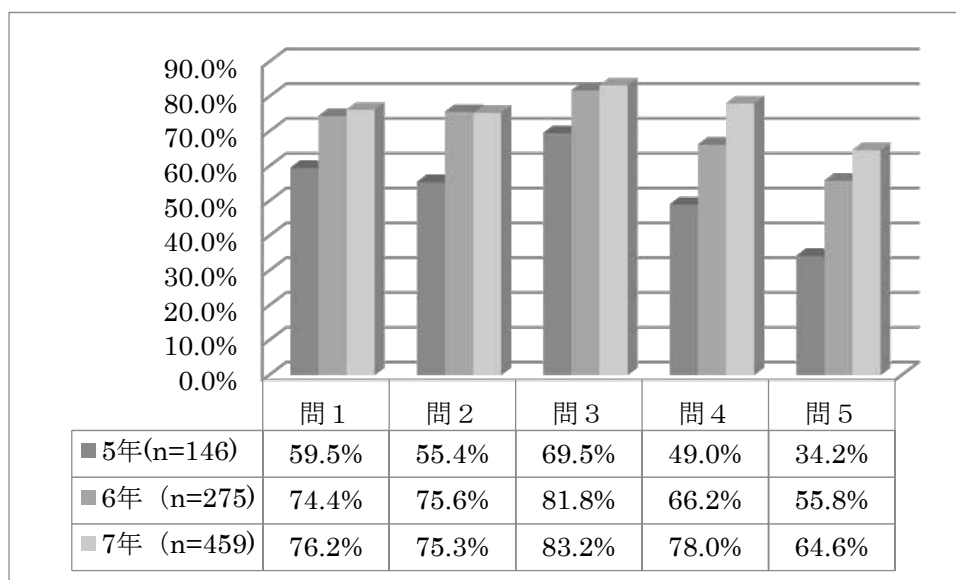


図3 語彙テスト結果（学年別）

以上の結果から明らかとなったことは次の通りである。

- (1) a. 学年を追うごとに、全体的に正解率が高くなってきている。
- b. 問4・5を見ると、文字に関する技能が学年を追うごとに顕著な伸びが見られる。
- c. 音声に関する問1～3と、文字に関する問4～5を比較すると、音声に関する技能の方が、文字に関する技能に先行して正解率が高くなっていることがわかる。
- d. 音声に関する問1と2を比較すると、必ずしも選択式の問題である問1の正解率が、記述式の問題である問2の正解率よりも高いわけではない。
- e. 文字に関する問4と5を比較すると、選択式の問題である問4の正解率が、記述式の問題である問5の正解率よりも高い。
- f. 音声を選択する問題である問3の正解率が、すべての学年において他の問の正解率よりも高い。

来年度以降はこの結果をもとにデータを重ね、どのような経年推移があるかを検証することとする。

### 3. 情意アンケートの集計結果から

2013年度5月、小学4年生から中学1年生を対象に情意アンケートを実施した。アンケートは、萬谷ほか(2013)で使用したものに能力感(～できるという自信)を尋ねる4項目を合わせた計36項目からなっている。萬谷ほかでは、このアンケートを1,236名の4年生から6年生の児童に対して行い、データを因子分析した結果、6つの因子(自律志向、統合志向、関係性、非WTC、遂行目標、内発志向)を特定している。本調査でもこれらの観点から児童・生徒の意識を探ることができることを期待し、同様のアンケート項目を採用した。

本調査の対象者は、以下の通りとなっている(5,6年生の一部は含まれていない)。

学年	人数
4年生	141名
5年生	322名
6年生	118名
中学1年生	330名
計	911名

これらの児童・生徒を対象に行ったアンケートデータを因子分析したところ、以下の6つの因子が特定された。これらの因子や因子を構成する質問項目は、能力感(～できるという自信)の因子と内発志向の因子を除いて、萬谷ほか(2013)とほぼ一致しており、これは外国語活動を経験している、あるいは経験し始めた児童・生徒が共通に持つ意識に、

どのような要因が影響を与えているかを示しているものと考えられる。

第1因子	自律志向(学習への意欲)
第2因子	統合志向(英語・文化への興味)
第3因子	関係性(授業への意識)
第4因子	能力感(～できるという自信)
第5因子	遂行目標(外発的動機)
第6因子	非WTC(コミュニケーションへの非積極性)

次に、この因子をもとに学年間でどのような差があるかを調べるために、データ処理したところ、第1因子、第3因子、第4因子、第5因子の4つの因子において、差が見られ、さらに詳細に検討した結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 「学習への意欲」に関しては、5、6年生が低く、4年生、中学1年生の意欲が高い傾向がある。(この因子を構成する質問項目を以下に例示している)

Q14	英語ができるようになって、さらに努力をしていきたい。
Q31	これまで英語について学習したことを思い出して、どれだけできたかを確認することは役に立つ。
Q28	誰かに言われたからでなく、自分がやりたいので英語を学んでいる。

- 2) 「外国語活動の授業が有効だったかの意識」の点では、4、5年生が高く、6年生、中学1年生では低い傾向がある。

Q8	小学校外国語活動の時間の先生の教え方は自分に合っていたと思う。
Q4	小学校外国語活動の時間に行なった活動が楽しいから取り組んだ。
Q3	小学校外国語活動で学んだことは自分にとって役に立ったと思う。

- 3) 「～できる自信」においては、5年生よりも中学1年生の方が自信がある傾向がある。

Q34	自分の気分について英語で言うことができる。
Q33	自分の名前を英語で言うことができる。
Q36	前の英語の時間にならった言葉を言うことができる。

- 4) 「外発的動機による目標」においては、4、5、6年生と比べ、中学1年生は高い傾向がある。

Q18	よい成績をとれるようになりたいので英語の勉強をしている。
Q19	先生や親にほめられたい、または、しかられたくないから英語の勉強をしている。
Q17	他の人に負けるのはくやしいので英語の勉強をしている。

5)「学習動機が英語や英語圏の文化への興味（統合的動機）」や「コミュニケーションへの非消極性」では，学年間による差が見られなかった。

このアンケート調査により，開発学校としてスタートした時点での本学附属学校の児童・生徒の意識を一定程度明らかにすることができたと言えるだろう。今後同様の調査を開発学校指定期間を通じて行い，指導内容・指導方法の改善によってどのように意識が変容していくかを検証していきたい。

萬谷隆一，泉恵美子，アレン玉井光江，長沼君主，田縁真弓，大田亜紀，森本敦子(2013)「外国語活動の評価方法に関する研究－発達段階を意識した評価のあり方－」*JES Journal*, 13, 小学校英語教育学会, pp.212-226.

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第55条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指示を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容の全てが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

平成26年3月



北海道教育大学附属札幌小学校  
北海道教育大学附属旭川小学校  
北海道教育大学附属函館小学校  
北海道教育大学附属釧路小学校  
北海道教育大学附属札幌中学校  
北海道教育大学附属旭川中学校  
北海道教育大学附属函館中学校  
北海道教育大学附属釧路中学校